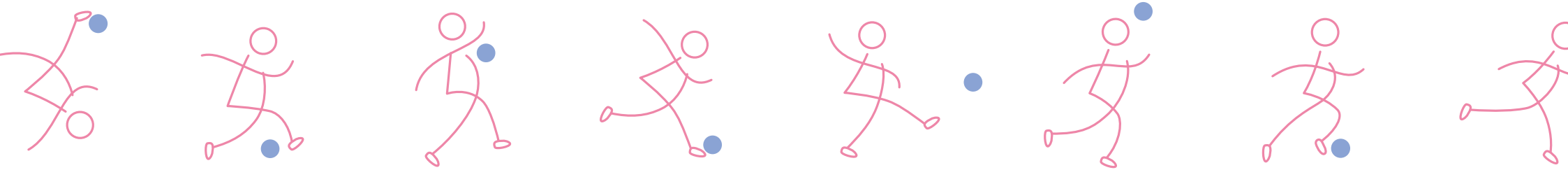
PASS TO THE FUTURE

HOKKAIDO FOOTBALL ASSOCIATION



［北海道のフットボールを支える女性たち］

２１人の先輩たちの経験が
皆さんの未来につながりますように

PASS TO THE FUTURE

はじめに

2020年度は、コロナウイルス感染症の影響のより北海道でも9月から大会が開催されるなど今まで経験したことのない大きな影響を受けました。改めてスポーツの大切について考えさせられた1年であったと思います。

さて、JFAは日本の女子サッカーの目指すべき姿を定めた「なでしこビジョン」を掲げ、女子サッカーの普及と発展を目指すとともに、女子サッカー固有の価値でサッカー・スポーツ、社会の発展に貢献し、女性活躍社会へとつなげていくことを目標としています。北海道においても、女性の活躍を体現する優秀な女性たちが、指導者や審判、運営スタッフなどの様々な立場で、サッカー・フットサル界を支えています。多様な職業や家庭人としての生活基盤を持つ彼女たちが、様々な選択肢を前にして何を基準に何を選んできたのか、サッカーやフットサルがいかに原動力となりえたかを知ることは、若い選手の皆さんにとって、生涯にわたってスポーツにかかわり続けるためのヒントになればと考え、JFA女子サッカーデー事業として、『PASS TO THE FUTURE-北海道のフットボールを支える女性たち-』を製作しました。

2021年9月、日本初の女性のプロサッカーリーグが開幕します。WEリーグ（Women Empowerment Leagueの略称）は女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人一人が輝く社会の実現・発展に貢献する」と理念を掲げています。日本のみならず世界中の女子選手にプロサッカー選手という道が開かれました。北海道出身の女子プロサッカー選手がたくさん誕生することを期待しています。さらに、このプロリーグ開催より、審判員や指導者など女性が活躍する場が増えます。北海道サッカー協会としてもこの機会に人材育成や環境づくりを後押しできるよう取り組んで行きたいと考えています。

昨今、女性が活躍する話題も耳にすることが多くなっていますが、女性が置かれている立場は、女性にとってまだまだ満足のいく社会には至っていません。男性と比較しても、仕事の内容であるとか、収入、地位、また、女性はこうあるべきであるという社会の目によって、障壁も多く大変不自由であるというのが日本の現状です。また、妊娠や出産、育児などの理由で、仕事を続けるかどうか、重大な選択をしなければならないのは女性です。また、コロナの影響で、女性の置かれた状況は数十年前の状況に戻ったとも言われています。日本のジェンダーギャップ指数は、世界153国中、121位だそうです。日本では、まだまだ男女の格差が大きく、男女平等にはなっていません。女性がやりたいことがやれて、活躍できる社会にするためには、正しい認識や、社会の問題にも目を向けていくことも大切です。そのために、仲間を増やし、いろいろな人の協力を得たりすることが必要となります。

『PASS TO THE FUTURE』本冊子が、選手の皆さんの将来に向けたPASSとなり、さらにその先にもつながっていくことを心から願っています。

最後になりましたが、ご寄稿を賜りました熊谷選手、髙瀬選手、手代木審判員、選手たちのためにご経験を語ってくださった21名の女性の皆さま、編集にご尽力いただきました株式会社ベンヌ様、INAC神戸 レオネッサ様、北海道協会事務局のスタッフの皆さまをはじめ、関係各位に心より御礼申し上げます。また、本冊子は、JFAが発行した『サッカー ×キャリア×未来～ Your Life with Football ～』を参考にさせていただき製作に至りました。ご助言をいただきましたJFAの皆さまに、心より感謝申し上げます。

公益財団法人 北海道サッカー協会 副会長

鷲津 裕美

SAKI KUMAGAI

真駒内サッカースポーツ少年団からクラブフィールズ・リンダを経て、宮城県の常盤木学園高等学校女子サッカー部へ。筑波大学で学びながら浦和レッドダイヤモンズで活躍。現在は、オリンピック・リヨン(フランス)所属。2011年FIFA女子W杯では全試合に出場し、なでしこジャパンの優勝に貢献。現なでしこジャパンの主将。

熊谷 紗希さん
［札幌市出身］

選手の皆さんへ

私がサッカーを始めたのは、4歳上の兄の影響です。今は女子だけのサッカーチームが数多くあるとは思いますが、その当時は女子だけのチームがなく、男子に混ざってやることが当たり前の環境でした。昔から負けず嫌いな部分もありましたが、何より「大好きなサッカーが上手くなりたい、大好きなサッカーを楽しむ」一心でサッカーと向き合ってきました。
今でもそうですが、サッカーを嫌いになったことは一度もないです。もちろん上手くいかないことも沢山ありますが、そんな時でも楽しめるように、ポジティブに捉えています。自分が楽しんでいる時ほど、良いプレーができるし、上手くなれると思いますので、是非皆さんにもその気持ちを持ち続けてプレーしてほしいなと思います。
そして、子供たちに伝えたいこととしては、感謝の気持ちを持って、何事も「楽しむ」ということです。自分が好きなことに取り組める環境に、そしてそんな環境や自分自身を支えてくれる方々に感謝の気持ちを持って、好きなことを全力で楽しんでください。
私は高校で親元を離れ、当時は感謝の気持ちを伝えたり、感じたりする機会は中々なかったですが、プロサッカー選手になり改めて、家族、そしてサッカー関係者の方々に感謝の気持ちを強く感じています。

北海道のサッカーを支える皆様へ

この世界的なコロナ禍の中、私としても昨年は人生ではじめてと感じるほどサッカーが出来ない状況に直面しました。試合もなく、チームの活動もできない状況が3ヶ月ほど続き、活動が再開されることになって改めてサッカーができる喜びを感じました。
サッカー関係者の方々に大変感謝しております。
今年ついに日本女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」がスタートしますが、地元北海道のチームが将来的にこの「WEリーグ」に参戦し、北海道のサッカーが今よりもさらに発展することを願ってます。

MEGUMI TAKASE

北見オニオンキッド、北見リトルウィングス、網走ジュニアユース、釧路リベラルティを経て北海道文教明清高校女子サッカー部へ。卒業後、INAC神戸レオネッサに入団し新人賞を獲得。2011年FIFA女子W杯ドイツ大会の優勝メンバー。INACの中心選手として日本の女子サッカー界を牽引し続け、2021年9月開幕のWEリーグでの活躍も期待されている。

髙瀬 愛実さん
［北見市出身］

全ての指導者、運営スタッフ、審判の皆さんへの感謝を

私は中学生まで地元の北見市でサッカーをしていました。地元に女子チームがなく、週末に釧路にある女子チームの練習に参加していました。地元の男子チームにも所属していましたが、女子だけでサッカーができる事がとても楽しかったのを覚えています。
この釧路のチームとの繋がりを作って下さったのが地元にいた唯一の女性コーチでした。この方がいなければ女子サッカーという世界に触れずに思春期を迎え、高校生になるまでサッカーから少し距離を置いていたのではないかと思います。
高校入学で地元を離れる時、振り返ると多くの指導者の方やサッカー関係者、そして家族が、私がサッカーを続けられるようにと何とか道を作ってくれていたのだと気づき、感謝の気持ちでいっぱいになりました。
今の自分があるのは、これまで関わってきて下さった全ての指導者の方々のお陰です。好きな事に全力を注げる場所があったのは、いつも大会を運営して下さるスタッフの方々、同じ熱量で試合をしてくださる審判団の皆さんがいたからです。ありがとうございました。

感謝の気持ちを忘れず、初心を忘れない

選手の皆さん。どんな時も感謝の気持ちを忘れず、そして出会った方たちにしっかりと感謝を伝えられるような選手でいてください！
私もそんな選手でいられるよう初心を忘れず頑張っていきたいと思います。

©JFA

NAOMI TESHIROGI

©JFA

帯広南商業高校女子サッカー部の顧問の先生の勧めで審判員3級資格取得。整形外科で勤務しながら女子1級審判員を目指し、26歳で取得。FIFA国際審判員にJFAから推薦され、AFC主催大会で副審として経験を積み、2015 FIFA女子ワールドカップ、リオデジャネイロオリンピックと活躍を広げている。現在、秋田県秋田市在住。

手代木 直美さん
［清水町出身］

女子サッカーに関わる皆さんへ

様々なスポーツの中から女子サッカーに出会い、審判に魅力を感じ、私がサッカーに関わり続けていられるのは、活動を支えてくれる皆様の応援のおかげです。
審判活動は時に苦しいこともありますし、辞めたいと感じることもありますが、支えてくれる仲間や、女子サッカーの魅力を教えてくれる選手の活躍から勇気をもらい、継続することの大切さを学ばせてもらっています。
ルールを守ること、仲間を大切にすること、感謝をすること、挑戦すること、諦めないこと、正直に生きること、他にもたくさんの大切なことを、審判活動を通じて気づかせてもらいました。
これらの経験は、社会において必ず役立つことであり、マイナスになることはありません。サッカーに限らずスポーツは、する人・見る人・支える人がいて成り立つものです。様々な立場からスポーツに関われることに喜びを感じ、これからも女子サッカーの魅力を多くの皆様に伝えられるように、共に協力して盛り上げていきましょう。

[INDEX]

はじめに 2
鷲津　裕美
北海道の女性たちへのエール 3
熊谷　紗希
髙瀬　愛実
手代木　直美
INDEX 5
21人のPROFILE
MESSAGE
01　中川　綾子 7
02　大岩　真由美 8
03　勝谷　忍 9
04　稲葉　里美 10
05　浅利　清美 11
06　遠藤　晴美 12
07　根岸　睦美 13
08　中村　麻衣 14
09　詫間　美樹 15
10　金子　弘恵 16
11　浮田　あきな 17
12　藤村　茉由 18
13　浜田　亜紀子 19
14　宗像　訓子 20
15　三澤　絢子 21
16　坂本　葵 22
17　茎津　都 23
18　森野　久美子 24
19　安芸　瑞穂 25
20　長濱　由紀子 26
21　河原　しおり 27
PASS TO THE FUTURE 29

21人の
PROFILE

RYOKO NAKAGAWA
01
中川 綾子
[小樽市出身]

(公財) 北海道サッカー協会 理事
女子委員長 第3種委員会委員／
仁木町立銀山中学校教諭

[後押ししてくれているひと・リスペクトしているひと]

岩見沢の大原勇治先生のおかげで中学校教諭を目指し、現在の自分につながりました。
日本サッカー指導者協会の藤原明夫さんのパワフルなご活動・人をつなぐ力をリスペクトしています。

MAYUMI OIWA
02
大岩 真由美
[室蘭市出身]

(公財) 北海道サッカー協会 理事 審判委員会委員／
室蘭地区サッカー協会 副会長 女子委員会 審判委員会／
JFA S級レフェリーインストラクター兼アセッサー
女子1級審判育成指導アマチュア分科会

[後押ししてくれているひと]

未知の世界、審判への道に悩んだとき、「お前が歩けば道ができる！」と中学時代の恩師からいただいた言葉が、今でも私の背中を押してくれています。

SHINOBU KATSUYA
03
勝谷 忍
[札幌市出身]

(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会
審判委員会／2級審判員／
L・KAJI-MA 選手

[支えてくれるひと]

同じ目標に向かって共に活動してくれる仲間たち。サッカーは一人では出来ないし人間は一人では生きていけない。支えあえる仲間がいるからこそ前に進めます。

SATOMI INABA
04
稲葉 里美
[恵庭市出身]

サッカー女子1級審判員

[私の原動力]

私のやりたいことを最後まで反対せず応援してくれる家族、そして悔し涙を流してしまったときも親身に支えてくれる審判仲間は、私の原動力です。

KIYOMI ASARI
05
浅利 清美
[函館市出身]

BP函館キルティ・BP函館キルティ U-15 監督／
JFA 女子サッカー普及コーディネーター 道南地区担当／
(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
函館地区サッカー協会 女子委員長・技術委員会 トレセンコーチ
乙部町立乙部中学校 養護教諭

[支えてくれているひと]

チームメイトや各地でサッカーに関わっている方々との繋がりです。そして、最も支えてくれているのは家族です。

HARUMI ENDO
06
遠藤 晴美
[幕別町出身]

十勝地区サッカー協会 女子委員長／
BIGZ池田 代表／
(福)池田光寿会 課長・介護支援専門員

[刺激を受けたひと]

日本で最初の女性指導者といわれる綾部美知枝さんには女性もサッカーで活躍できることを教えてもらいました。

MUTSUMI NEGISHI
07
根岸 睦美
[苫小牧市出身]

苫小牧地区サッカー協会 女子委員長

[リスペクトしているひと・後押ししてくれているひと]

苫小牧地区協会 副理事長の黒澤幸子さんは、私にサッカーの楽しさを教えてくれた「若草レディース」のチームメイトであり、女子委員長としての私を支えてくださっています。

MAI NAKAMURA
08
中村 麻衣
[北広島市出身]

JFA女子サッカー普及コーディネーター北海道 札幌地区担当／
(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会委員／
(一社) 札幌サッカー協会 理事 女子普及担当／
TeineEGZASFC監督兼選手／リカシィ コーチ／なでしこ治療院 院長

[私の原動力]

自分自身が、選手時代に色々な方達に関わってもらい、支えてくださったことへの恩返しをしたいという気持ちが、今の自分の活動を支えています。

MIKI TAKUMA
09
詫間 美樹
[札幌市出身]

北海道札幌東商業高等学校女子サッカー部 監督／
北海道札幌東商業高等学校 教諭
(2021年度よりノルディーア北海道 監督)

[後押ししてくれているひと]

サッカー中心の生活を送ることができたのは、両親や姉弟のおかげです。社会人3年目、初めて父が私の試合に夢中になったといってくれました。とても嬉しい出来事でした。

HIROE KANEKO
10
金子 弘恵
[稚内市出身]

ノルディーア北海道 チーフマネージャー

[リスペクトしているひと]

ノルディーア北海道の選手たちの社会人と選手との両立している姿は逞しく、輝いています。誇りをもってサッカーの面白さや素晴らしさをたくさんの人に伝えて欲しいなと思います。

AKINA UKITA
11
浮田 あきな
[釧路市出身]

北海道リラ・コンサドーレ監督／
JFA公認B級コーチ

[信頼できる仲間]

リラに関わるスタッフは、なんでも相談できる頼もしい仲間です。指導者同士のコミュニケーションやチームワークもリラ・コンサドーレを支える重要な要素だと思っています。

MAYU FUJIMURA
12
藤村 茉由
[旭川市出身]

(一社) コンサドーレ北海道スポーツクラブ
スクールコーチ

[サッカーの楽しさを教えてくれたひと]

小学生のとき、はじめてサッカーを教えてくれた廣川コーチと鈴木コーチのおかげで、サッカーの楽しさを知りました。その気持ちを今も持ち続けています。

AKIKO HAMADA
13
浜田 亜紀子
[東京都出身]

(株) コンサドーレ
マーケティング・プロモーション事業部
プロモーション担当

[リスペクトしているひと]

弊社代表の野々村芳和です。昔から度々意見がぶつかるのですが、最後には野々村の方が良いアイディアを思いつくので。いつかぎゃふんと言わせたいですが、今のところ、敵いません。

SATOKO MUNEKATA
14
宗像 訓子
[浦河町出身]

北海道コンサドーレ札幌 サッカースクールコーチ
アカデミーコーチU-12 Girls
JFA公認B級コーチ　47FAインストラクター
NPO法人さっぽろAMスポーツクラブ

[リスペクトしているひと・憧れているひと]

大空翼君にきっかけを作ってもらい、KAZUさんの存在がサッカー界に引き込んでくれました。そして、「ボールは友達」を体現する小野伸二選手に憧れています。

JUNKO MISAWA
15
三澤 絢子
[浦河町出身]

札幌大学女子サッカー部ヴィスタ 監督／
JFA公認B級コーチ／
札幌大学 事務職員

[私の原動力]

指導者になってから関わった選手（卒業生を含む）たちが私の原動力です。選手たちが居なければ私は指導者としてサッカーに関わることはできません。心から感謝しています。

AOI SAKAMOTO
16
坂本 葵
[旭川市出身]

旭川実業高等学校女子サッカー部 監督／
JFA公認C級コーチ・GK-C級コーチ／
旭川地区サッカー協会 女子委員会 委員／旭川女子トレセンスタッフ／
旭川実業高等学校 教諭

[支えてくれているひと]

チームの選手と家族が私を支えてくれています。私に笑顔をくれる選手のおかげで今の自分があります。私の家族は、何も言わずにどんなときでも支え、応援してくれます。

MIYAKO KUKITSU
17
茎津 都
[札幌市出身]

(一社)北海道フットサル連盟
常務理事 事務局長 フットサル女子委員長／
(有) くきつ 代表取締役

[リスペクトしているひと]

中学の恩師、体育教師だった坂野勝彦先生は、サッカー経験がない中、熱い気持ちで指導法を勉強し、チームを全国ベスト8に導いてくれました。

KUMIKO MORINO
18
森野 久美子
[函館市出身]

エスポラーダ北海道イルネーヴェ コーチ U-15監督／
(公財) 北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
北海道フットサル連盟 常務理事

[リスペクトしているひと]

エスポラーダ北海道の指導者の皆さんは、選手としてフットサルという競技を北海道に確立し、引退して指導法を学び、いくつもの戦術を実践しています。憧れであり目標です。

MIZUHO AKI
19
安芸 瑞穂
[札幌市出身]

(公財) 北海道サッカー協会
事務総長

[リスペクトしているひと]

長きにわたり仕事にもサッカーにも情熱を注がれ、サッカーを通じて豊かな人生を送られている北海道のシニア諸先輩方を目標にし、リスペクトしています。

YUKIKO NAGAHAMA
20
長濱 由紀子
[蘭越町出身]

(公財) 北海道サッカー協会
事務局長

[リスペクトしているひと]

信念をもって努力できる澤穂希さん、
いつまでも現役でいらっしゃる三浦知良さん
をリスペクトしています。

SHIORI KAWAHARA
21
河原 しおり
[深川町出身]

(公財) 北海道サッカー協会 女子ユースダイレクター
技術委員会 女子担当　北海道トレセンスタッフ／
札幌東商業高校 保健体育科教諭
（現在育休中；女子サッカー部監督*2018・2019年度）

[リスペクトしているひと]

筑波大学女子サッカー部を創部した小林美由紀さんのゼロから新しいことを作り、周りを巻き込むパワーは本当に尊敬していますし、見習いたいといつも思います。

MESSAGE | 01

RYOKO NAKAGAWA

中川 綾子

公益財団法人北海道サッカー協会　理事／
女子委員長／第3種委員会委員／
仁木町立銀山中学校教諭（専門は保健体育と社会。主たる業務は特別支援学級の担任。）

長年女子委員長を務められた鷲津裕美さん（現北海道協会 副会長）から
任を引き継ぎ、1年目を終えようとしている中川綾子さん。
3種や4種の経験、本業である中学校教諭としての経験を活かし、
北海道の女子サッカー界に新しい風を吹き込んでいます。

様々な「出会い」がサッカーとの結びつきを強めていく

父が古河電工で勤務していたため、小さい頃からサッカーは身近な存在でした。5歳の時、横浜の社宅のまわりにはサッカー選手が暮らしており、目の前は三ツ沢公園球技場。日本リーグは当たり前に観に行けて、「近所のお兄さん」だった吉田弘さんや菅野将晃さんが「鳥かご」をして遊んでくれる、今思うと、とても恵まれた環境でした。小学5年の秋に札幌に戻りましたが、サッカー少年団には入れず、バレーボールで身体を動かしていました。

中学生になり、東白石中学女子サッカー部に入部。ですが、3年生が引退したらチームが休止状態に。中3の時に下の学年が多く入ってきたのでGKで試合限定の復帰をしました。高校時代にJリーグが開幕したこともあり、スポーツに興味を持ち、北海道教育大学教育学部岩見沢校社会教育課程スポーツコミュニケーション分野に入学。大学では指導教官として越山先生（現北海道協会 副会長）に出会い、ゼミの一環で女子のフットサルリーグの立ち上げを応援していただきました。教育実習では担当教官として大原先生（現岩見沢ルファヴェニール監督）に出会いました。「女子も一緒にやるサッカーの授業がしたいです」と当時サッカー部でもない私が言ったのに対して、大原先生は「どんどんやって」と言ってくださり、自分が実践した後に、その指導案を元に改良した授業実践をしていただきました。お二人との出会いがなければ、中学校教諭にも、サッカーの指導者にもなろうとは思わなかったと思います。

部活動の指導者の経験が、女子委員長へつながる

16年前に教員として男子サッカー部を指導することになり、本格的にサッカーの世界へ。指導・審判・運営全て自分たちでやるのが当たり前でしたので、学ばせてもらうことがたくさんありました。初心者からの育成やチーム作りの大変さは身をもって経験でき、選手のがんばりのおかげで全道大会まで勝ち抜くこともできたので、視野は広がりました。実技は苦手ながらも、D級、C級、フットサルC級コーチを取得。夫が小樽地区で4種や3種の指導者をしながらトレセンスタッフをしていたこともあり、私自身も各種別の方々への指導経験を得られました。やがて小樽地区協会の3種委員会を手伝うようになり、女子チームの小樽Corsa‘rioのお手伝いの延長で小樽地区協会の女子委員長を務めるようになりました。このとき、前女子委員会副委員長であった渡邉均さんからHKFA女子委員を兼任するよう声をかけていただき、今につながっています。

多くの方に耳を傾け、「繋いでいくこと」が重要な役割

北海道は1都道府県としてだけではなく1地域としての活動と兼ねているため、全国大会につながる全道大会を開催するための業務が多くあります。また、男子で言うと1種（社会人）～ 4種（U-12）までをカバーしなければならないため、選手人口は男子よりも少ないものの、幅広い年代について考えながら動いていかなければなりません。今後、JFAの指針により、女子の大会形態は男子に近づいているため、組織の中でカテゴリー化が必要になってくるのではないかと思っています。そのためには、様々な情報を北海道の女子サッカーにかかわる多くの方と共有し、事業を進めていく必要があります。話をお聞きする場を数多く持ち、男子の各種別の方とも連携していくこと、皆さんを「繋いでいくこと」が女子委員長の重要な役割だと認識しています。

教員をしながら重要な任についており、他の指導者やスタッフの方と同様、つねにダブルワーク状態なので、いつ自分のキャパシティを超えてしまうのではないかと不安はありますが、職場には、応援してくださる方が多く、支えになっています。また、女子がサッカーをやりづらかった時代を知っているだけに、少しでも障壁をなくしたいと思う気持ちは、今の私の原動力であり、選手の笑顔がたくさん見られるとやりがいを感じます。今後も皆さんにご助言をいただきながら、女子サッカーの環境作りに貢献できたらと思います。

MAYUMI OIWA

大岩 真由美

公益財団法人北海道サッカー協会 理事・審判委員会女子部
室蘭地区サッカー協会 副会長・女子委員会担務・審判委員会担務
JFA S級レフェリーインストラクター兼アセッサー
JFA女子1級審判育成指導アマチュア分科会

国際審判員として活躍し、日本の女性審判員の「道」を
開拓してくださった大岩真由美さん。
後進の育成に努めながらも、今もサッカーが自分を成長させてくれると、
力強い言葉をいただきました。

恩師の言葉を支えに、女性審判の道を拓く

高校まではバレーボール部でしたが、中学時代に、高校選手権3位になった室蘭大谷高校をテレビで観て、サッカーの魅力に取りつかれ、高校卒業後、室蘭武陽サッカー少年団にコーチとして入団しました。スポーツを通じて大切なことを伝えることのできる指導者になり、ルールを覚えるために審判員としての活動もはじめ、また、少年団のお母さんたちとともにつくった女子チームで選手としてもピッチに立ちました。

やがて、審判員の上級へ挑戦するか、チームの指導者かと立ち止まって考える場面に。審判の道は全くの未知の世界であり、悩んだ際に中学時代の恩師に相談にいきました。その時に頂いた一言は「お前が歩けば道ができる！」。現在まで背中を押してくれている大切な言葉です。

2002年にFIFA主催大会で日本人女性初の主審としての任を務め、2004年には女性初の1級審判員の資格を取得。JFLでも笛を吹くようになりました。その後、女子W杯2007中国大会に主審として参加し、決勝にも第4審判員として参加するに至りました。

文字にすると順調にキャリアを重ねたように見えますが、恩師の言葉どおり、前例のないものへのチャレンジばかり。同じ経験をしている仲間も、悩みを共有できる仲間もなく、先の見えない道に悩み、苦しみ、「女性だから」という偏見との闘いの日々。安定した職や収入を得る保証もなく、実際、私が転職をした回数は、30回。そんな中でも、多くの審判指導者の方々が、勇気を持って、女性の私を起用し続けてくださったことで、諦めずに続けることができ、その感謝を行動で示そうと上京し、上級へチャレンジする覚悟もできました。職を転々としたことも、新しい人間関係の中で新しい仕事を覚えていく経験が「いつでも・どこでも・誰とでも」柔軟に対応できるという自分の強みにもつながりました。そして、審判員として、競技規則をしっかりと頭に叩き込み、フィールドで納得のいく判定を続けていくこと、試合にマッチした体力やスピードをつけていくこと。審判員としてなすべきことを積み重ねていったとき、試合の中で、女性への偏見が消えた瞬間を感じました。「選手は性別を気にしている訳ではない！納得のいく判定が欲しいんだ！」と。

2007FIFA女子ワールドカップ準決勝

指導者を経て、後進の育成へ

国際審判を退いたあと、室蘭大谷高校女子サッカー部の監督に就任しました。選手やスタッフと共に目標に向かって取組む3年間。優秀なスタッフに恵まれ、選手の努力のおかげで目標の「4冠」を達成。内容の濃い感動的で貴重な時間を選手に与えてもらいました。選手たちやスタッフに心から感謝しています。私のサッカー人生の中で最も印象的な出来事といえるかもしれません。

そして現在は、後進の育成のため、S級レフェリーインストラクター兼アセッサーとして、なでしこリーグやチャレンジリーグの会場に足を運び、試合を担当する女子1級審判員のレフェリングの評価とアドバイス等を担っています。また、北海道の女性審判員の「普及・育成・強化」を支えるべくHKFA審判委員会の女子部の一員として頼もしい仲間とともに働いています。蝦名部長は、誠実でいつもフェアを心がけてくださる新リーダーであり、宮武副部長は、審判割当やトレーニングマッチなどを調整してくださる縁の下の力持ち。大石さんは、遠方にも関わらず、可能な限り研修や大会に参加し、フィジカルコーチにもチャレンジしてくださっています。勝谷さんは、常に審判員と身近に接し、特に若い世代の審判員発掘や指導も積極的に行ってくださっています。

自分の道が意味あるものと実感

私の後に続いて、女性の1級審判員が誕生し、女子W杯では4大会連続で日本の審判員が笛を吹いています。北海道でも女性審判員が増えています。そして、審判引退後のインストラクターへの道も拓かれました。恩師の言葉に勇気をもらってから25年近く経った今、自分の歩んだ道を振り返って、意味あるものと実感できました。

サッカーは、スポーツ本来の面白さや魅力、感動を常に身近に感じることができます。スポーツを通じて多くの人との出逢い、その中で現在も自分を成長させてくれる存在です。これからも、多くの仲間と協力しながら、大好きなサッカー、大好きな審判を、笑顔で楽しみたいと思っています。

SHINOBU KATSUYA

勝谷 忍

公益財団法人 北海道サッカー協会 女子委員会 委員 審判部
審判委員会 女子部 部員／サッカー2級インストラクター／
サッカー2級審判員／フットサル2級審判員／L・KAJI-MA 選手・会計担当

バスケットボールの世界からママさんチームでサッカーの楽しさを知り、
審判の道に進んだ勝谷忍さん。
審判員の普及・育成活動を通じて、北海道サッカー界の環境整備に力を注ぎ
サッカーの楽しさを次の世代へ伝えています。

サッカーの楽しさを知り、もっと学びたいと審判員の道へ

小学生から実業団までバスケットボールを続けており、高校では強豪校に進学したため、全国大会へのプレッシャーを常に感じ、修学旅行さえ断念する日々だったことは、今では笑いの種です。バスケット一色だった私がはじめてサッカーに出会ったのは東京在住時。長男が東京読売ヴェルディのスクールに入ったのですが、そのときのコーチがとてもサッカーが上手で感動したことを覚えています。札幌に移り、息子が入団したサッカークラブ（前田中央FC）にママさんチーム（旧オストローズ現L・KAJI-MA）があり、自分自身もサッカーをはじめることに。初心者でも楽める環境が整っていて、いつの間にか選手として18年の年月を過ごしました。

サッカーが楽しくなってきたころ前田中央FCの監督から声を掛けて頂きキッズリーダーを取得し、幼稚園（さわらびサッカークラブ）でコーチとして子供たちと一緒にサッカーを楽しみながら学ばせて貰いました。同時にもっとサッカーを知りたいと強く思うようになり、周りの後押しもあって先ずは審判資格4級を取得することからはじめましたが、翌年は3級上申、その翌年には2級上申と、周囲の強靭的なサポートにて私の審判人生が走り出しました。

仲間たちに恥じないような審判員であるために

北海道女子サッカーリーグが開幕したころ、私はまだ3級審判員でした。当時は女子1級の手代木直美さんや佐藤恭子さんが主審をされていて圧倒的な存在感に憧れていました。後に国際審判となられた手代木さんには国際審判という立場など関係なく気さくに沢山ご指導頂き、どんな時も最後まで諦めず学びを与えてくださったことが、私自身の審判員としての姿勢を強固なものに成長させてくれたと感じています。また、前田中央FCの長谷山さんや櫻井さんをはじめ、スタッフ皆様には、私が本気で2級審判員を目指すと決めたときに、全力で応援していただきました。今でも支えてくれる大切な仲間たちです。人生の転機ともいえる出会いでサッカーに携わるきっかけをくれた監督や仲間たちに恥じない審判員を目指そうと全力で努力出来たことで、いつも感謝の気持ちを忘れず、出会った縁を大切に前向きに生きるメンタルが培われたと思っています。

サッカー 2級インストラクターを取得した際、サプライズで花束をいただきました。

大岩さん、手代木さんから受け継いだ学びを後輩へつなぐ

現在、自分自身も審判員としてピッチに立っていますが、北海道協会のスタッフとして、北海道協会主催大会の審判員派遣を行っているほか、インストラクターとして審判員の普及・育成の任に当たっています。とくに18歳未満の方が対象となるユース審判員の普及・育成に力を入れており、審判員講習会を開催して、女子選手が審判員資格を取得できる機会の拡大に努めています。また、実際に主審や副審を経験してもらうため、各カテゴリーの大会などにご協力をいただきながら研修会として実践できる場を設けています。こういった研修会では、審判員を通して新しい発見やサッカーの楽しさを違う角度から感じてもらい、はじめは緊張しながら試合に臨んでいたユース審判員が、次第に堂々と判定し成長していく姿に感動させられます。

北海道には世界で活躍された国際審判員の大岩真由美さんと手代木直美さん（現役）がいらっしゃいます。審判員としてだけではなく人として心から尊敬できる偉大な方たちです。仲間の大切さや敬う気持ち、何もないところから作り上げて行くことの重要性と心の強さを教えて頂きました。世界で戦ってきたお二方が築いて下さった北海道女子審判界を私も次世代の後輩たちへ伝え、未来のためにつなげていきたいと思います。

（公財）北海道サッカー協会
審判委員会女子部が
かかげる「5R」

Rising	上昇！
Respect	大切に思うこと！
Referee	審判員・仲間！
Retry	再試行・何度でもトライ！
Receive	支える，仲間を迎え入れる，新しいを受け入れる！

MESSAGE 04

SATOMI INABA

稲葉 里美

サッカー女子1級審判員

選手・指導者の経験を活かし、選手の特徴やチーム戦術を理解しながら、全国につながる重要な試合で笛を吹く稲葉里美さん。審判界をけん引していく先輩たちに続き、自らも道標になるべく、女子1級審判員として新たな挑戦に向かっています。

指導者として取得した審判員の資格

サッカーとの出会いは、小学3年生ごろ。兄弟がサッカー少年団に所属していたこともあり、それをみているうちに、興味を持ち始め、自分も始めたいと思うようになっていきました。3年生の冬に恵庭FC（現 バーモス恵庭FC）に入団し6年生まで続けました。中学生から19歳までは札幌第一レディースに所属しプレーヤーとしてピッチに立っていました。練習場所が遠方でしたが、チームに所属している間は、週3回の練習に欠かさず参加しました。今となっては印象深い経験として思い出されますが、中学生のころは両親に送り迎えをしてもらっていたので、迷惑をかけていたのかもしれないと思い、今、改めて感謝をしているところです。

選手を引退した後、指導者に興味を持ち、サッカー D級指導員の資格を取得し、自分が小学生のころに所属していたサッカー少年団のコーチに。およそ12年間指導に携わりました。

指導者という立場で、選手にかかわることで、選手を育てていくことの大変さを学びましたし、毎回勉強になることばかりでした。

審判員の資格は、指導者として欠かせないものだと認識し、このとき取得しました。

大岩真由美さんの講演から審判員の道へ

指導者として取得した審判員資格を所持していたおかげで、女性審判員の研修会に誘っていただく機会がありました。そのときの講師が、現在北海道協会審判委員会女子部にいらっしゃる大岩真由美さんでした。国際審判員として女子W杯で主審を務められたご経験をはじめ様々なお話をご本人から直接うかがったことで刺激を受け、より、審判員に魅力を感じるようになり、やがて審判員としての活動に力を入れたいと思うようになりました。様々なカテゴリーで審判を務め、経験を積ませていただき、全道大会などの大きな大会でも主審を任されるようになっていきました。

選手としての経験が、それぞれのチームの戦術を理解しながら試合を進めていくことにつながり、審判員としての試合コントロールに活きてくることがあります。チーム戦術、選手の意図を考え、予測して動くことを楽しいと感じ、それが審判員の魅力の一つだと思っています。試合前には、順位や選手の特徴、チーム戦術をできるだけ知るようにしています。また、競技規則を深く理解することはもちろんですが、走力の維持のため、週3～4回程度の有酸素運動をこころがけ、試合で走れる体力を維持するためトレーニングを行っています。いつでもどのような場面にも対応できる準備をしていくことが大切だと思っています。

自身も道標に

審判員として、自分に不足していることを受け入れることが出来ない時もあり、落ち込む時が多々ありましたし、辞めたいと思ったこともありました。けれども、審判の仲間は、私が悔し涙を流してしまった時も支えてくれ、親身になってくれました。そして、家族は、いつも私がやりたいことを必ず最後まで反対せず応援してくれました。選手からの言葉、チーム役員の方たちから感謝の言葉を言われた時には、辛い事ばかりじゃないと思い、次もそう言ってもらえるよう頑張ろうと思えます。ご助言くださる方の真摯な対応に感動し、審判員活動を続ける強い気持ちと、さらなるレベルアップに挑む後押しをいただきました。

WEリーグが開幕する2021年、女子1級審判員に合格しました。試験に臨むにあたり、自分に足りないものや出来ないことをそのままにしない、課題を次に修正し生かすため一生懸命に取り組むだけでした。この姿勢を変わらず継続し、覚悟を持って望んでいかなきゃならないと改めて感じました。女子審判部や審判委員会の方々の協力で、いろんな試合に参加させていただいたり、映像分析や研修会を行なってくださったから、試験で力を発揮できたと思いますし、自信を持つことができました。応援してくださった方々に、感謝の気持ちを忘れず、これからも選手のために走りきっていきたいと思います。そして、道を切り開いていった先輩方のように、私も同じように道標になって行きたいと思います。

KIYOMI ASARI

浅利 清美

BP函館キルティ・BP函館キルティ U-15 監督／
JFA 女子サッカー普及コーディネーター（道南担当）／公益財団法人北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
函館地区サッカー協会 女子委員長・技術委員会 トレセンコーチ
乙部町立乙部中学校 養護教諭

函館地区の女子サッカー業務を一手に引き受ける浅利清美さんは、
家族の支えの中で普及に向けた取り組みを進めるとともに、
ご自身がサッカーを楽しむことを忘れず選手としても活動しています。

支えられる側から、支える側へ

中学・高校までは、バスケットボールをしていましたが、北海道教育大学函館分校在学中に、女子サッカーができるチームがあると友人に誘われ、サッカーの世界に。楽しいことしか記憶にないほどサッカーに夢中になりました。やがて、BP 函館キルティで指導することになり、JFA 公認 C 級コーチや審判員資格を取得しました。資格取得や資格を更新するために必要な講習会の受講や研修会への参加によって、新しい刺激を受け、また、他の指導者や審判の方との情報共有ができ、指導者としての幅を広げるとともに、視野も広がっていきました。

プレーヤーとしていろいろな方々に支えていただいて、サッカーを続けられたことに感謝する中で、自分も何か役に立つことがあるのではないかと思うようになりました。皆様にご推薦いただくうちに、肩書が増え、関わりの範囲が広がっていき、函館地区を中心に女子サッカーに関わる業務を担うようになりました。

普及コーディネーターとして

私が担う役割の一つが、JFA 普及コーディネーターです。普及は、JFA がかかげる「なでしこビジョン」の第一の柱であり、2017 年に各都道府県に女子サッカー普及のための調整役として配置されました。北海道には、各ブロックに1名ずつ、５名のコーディネーターがいます。それぞれの地域によって環境は違いますが、女子サッカーのために頑張っている人たちを繋ぎ応援し、女の子がサッカーはじめるきっかけづくりや成長してもサッカーを続けられる環境をサッカーにかかわる人たちと共に整えていくことが求められています。私も、一人でも多くの人にサッカーを好きになってもらえるよう活動しています。

北海道の広域性は、様々な場面で議論に上がるところですが、距離の問題で活動が制限される女子選手は多くいます。中学生年代の登録減はもちろん大きな課題ですが、将来のスタッフを育てるためにも、近くにチームがない高校年代の選手や大人になってからサッカーを続けたいと考える選手にも、サポートできるようにしていきたいと思っています。色々なところに顔を出し、コミュニケーションをとって情報交流を行い、各地域での事例を自分の担当する地域に活かすとともに、情熱をもって活動している人をサポートしていくことを意識しながら、今後も活動したいと思います。

家族の支えのおかげで、サッカーを続けられる

サッカーを通じて、多くの人との出会いがあり、北海道のみならず日本中にいろいろな形でサッカーに関わっている人がいることを知りました。自分にとっての刺激や励みになっています。この頃は、サッカーを一緒にやったら、あれこれしゃべらなくてもどんな人なのかわかるようになってきました。そうしたサッカーでのつながりは、私の活動の大きな支えです。

そして、最も支えてくれているのは家族です。同年代で現役プレーヤーの夫、それぞれの環境でプレーヤーとしてがんばっている三人の娘たちです。家族は、私がサッカーを続けていることを応援してくれていて、家事が出来なくても家にいられなくてもやめるように言われたことが一度もありません。夫はシニアの練習に連れて行ってくれたり、大会の審判も引き受けてくれ大会運営を助けてくれます。娘たちも小さい頃から、グランドのわきで練習の邪魔をしないように遊んでいてくれましたし、大人になった今では、プレーヤーとして厳しい指示や指導をされることもあります。自分で自分を励ましながら、家族に支えてもらってサッカーが続けられています。どこまでできるかわかりませんが、みんなの力を借りていけるところまで頑張りたいと思っています。

運営スタッフとして、サッカーをしている人たちが、楽しそうにプレイしているのを見たり、指導者として、アドバイスしたことがうまくいったときの充実感は得難いものです。しかし、まずは、私自身がサッカーを楽しみ、生涯現役プレーヤーでありたいと思います。全国で対戦するチームには 70 代のキーパーや 60 歳以上の選手がたくさんいます。北海道では同年代や年上の選手が少ないですが、まだまだ現役でサッカーができると心強く感じました。サッカーがうまくなくても、子どもがいても、おばあちゃんになってもサッカーが楽しめるんだというみんなの励みになれたらと思います。

MESSAGE 06

HARUMI ENDO

遠藤 晴美

十勝地区サッカー協会 女子委員長／
BIGZ池田 代表／
社会福祉法人 池田光寿会
池田町デイサービスセンター・池田町デイサービスセンター居宅介護支援事業所　課長・介護支援専門員

大人になってからサッカーに出会い、多くの出会いを糧にして、
十勝地区の女子委員長としてご尽力されている遠藤晴美さんは、
選手の皆さんの活躍と人間としての成長を願っていらっしゃいます。

全国ママさんサッカー大会での出会い

小学生のときはスケートと剣道、中学高校はバレーボール、そして、社会人になってからソフトボールやカーリングと、様々なスポーツを体験してきました。サッカーとの出会いは、21歳のとき。会社の同僚の奥様に誘われ「池田シルフィー」に入りました。入ってすぐに全道大会に連れていかれ、札幌大学のグランドでただボールを追いかけただけの試合に出たことを思い出します。そのことがきっかけでサッカーがうまくなりたいと思い、週3日、池田まで練習に通いました。

十勝地区は、1960年代から池田町を中心にサッカーが盛んであり、また、日本リーグ公式戦を招聘するなど、トップレベルの試合を観戦できる環境も比較的早く整っていました。十勝地区協会として、施設の充実に取り組んだこともあり、全国的に見てもグラウンド保有率は他を圧倒しています。今では、帯広の森陸上競技場をはじめ、十勝地区には、天然芝・人工芝あわせて約50のグラウンドがあります。このような環境だからこそ、女性がサッカーをすることに理解のある方が多く、1985年、十勝地区に初の女子サッカーチーム「池田シルフィー」が誕生。現在、私が代表を務めるBIGZ池田として現在まで続いています。1996年には、LFC清水、リトルガールズママの選手と十勝合同チームで参戦したママさんサッカー大会の全道予選で優勝し、全国大会へ。私にとって初の全国大会出場でしたが、準優勝という結果を得ました。ママさんサッカー大会は私にとって印象深い出会いが多く、日本で最初の女性指導者といわれる綾部美知枝さんを知ったのもこのときです。綾部さんには女性もサッカーで活躍できることを教えてもらいました。また、全国準優勝を果たしたとき、のちに国際副審として活躍される清水町出身の手代木直美さんのお母さんもチームメイトとして出場しており、当時、小学6年生の直美さんが一緒に静岡まで来てくれて応援してくれたことを思い出します。彼女が帯広南商業高校でサッカーをはじめ、その後素晴らしい審判員になったことはとてもうれしい出来事です。今も応援しています。

十勝地区の女子選手の活躍

2000年4月、十勝地区協会で女子サッカーへ力を入れる機運がさらに高まり、女子委員会が設置されました。女子のトレセン活動にも力を入れるようになり、中学女子サッカー十勝選抜が編成されたのもそのころです。指導者の皆さんの熱心なご活動により、2006年には北海道ガールズエイト（U-12）大会でとかち帯広トレセンが優勝。2013年にとかちFCなでしこが熊谷高瀬杯ガールズ（U-12）サッカー大会で優勝。2020年にはU-15選手権全道大会で十勝FSリトルガールズが初優勝し、全国の切符を手しました。また、フットサルにも力を入れており、FC甲山レディースや十勝FSリトルガールズが全国大会で実績を残しています。

私自身、選手から運営スタッフへと形を変えて、サッカーに関わり続け、選手たちのためにできる限りのサポートをしたいと思い、審判員資格やマッチコミッショナー資格を取得。今は女子委員長としての任に就いていますが、十勝地区の選手の活躍は、何よりもうれしいです。

選手の皆さんへ

十勝の選手たちみんなを自分の子どものような気持ちで見守っています。サッカーの技術がうまくなるだけではなく、自分のことは自分でやれる選手になってほしいと思っています。掃除、洗濯、食事の用意、後片づけ。特に食べることに興味を持って、お母さんの味を習得してほしいです。楽しんで食べて、健康管理ができて、強い体を作ってほしいと思います。

私の母は体が弱く、私が小さい時から小学校6年生まで、入退院を繰り返し、母と過ごす時間が少なく、何でも自分でするしかなく、10歳ごろには夕食の準備をして食べていました。姉とけんかしながらカレーライスを作っていたのを思い出します。大袈裟かもしれませんが、これが生きる知恵や力になっています。

私はもう退職する年齢ですが、退職後も様々な形で人の役に立ちたいと思います。今まで努力して取得した資格を生かし、自分ができることをやっていきたいと思っています。

MUTSUMI NEGISHI

根岸 睦美

苫小牧地区サッカー協会 女子委員長

2020年から苫小牧地区の女子委員長に就任した根岸睦美さんは、
少年団に入った息子さんの影響でサッカーの世界に。
苫小牧地区でサッカーの楽しさを共有できる仲間を増やしたいと
活動されています。

息子の一言で、サッカーの世界に

学生時代は、スピードスケートや陸上競技選手で、とにかくスポーツをし続けていたものの、卒業後は、全くスポーツをしない生活に。しかし、息子がスポーツ少年団に入団し、サッカーをはじめたため息子の応援に全力投球。ときに助言めいた言葉を発すると、息子からサッカーのルールも知らないくせに、と一言。息子の言葉にハッとしたのもあり、悔しくもあり、ルールを覚えるためにサッカーをはじめることにしました。息子の少年団の保護者仲間に誘われて入った若草レディースは、中学生からママさんまで、年齢も立場も様々でしたが、家族のようなチームでした。学生時代以来に体を動かすこともうれしく、サッカーが楽しくて仕方ありませんでした。はじめのうちは、息子の応援がメインで、自分は二の次でしたが、息子の成長につれ、自分の時間もでき、やがてチームメイトの黒澤さんに声をかけていただき、大会運営に関わるようになりました。

地区協会の一員としての自覚

黒澤さんは、苫小牧地区協会で、女子委員会や4種、競技運営など様々な業務をご担当されている方で、私が最も尊敬する方です。黒澤さんと一緒にキッズのフェスティバルや幼稚園の巡回指導をお手伝いしたり、以前女子委員長でいらした萬純二郎さんとともに北海道協会主催の女子の大会運営の経験を積みました。苫小牧地区は、女子の大会であっても、社会人やシニアの皆さんや審判の皆さんがとても協力的で、困ったときには助けてくれます。皆さんのやさしさや情熱に触れるたび、苫小牧地区協会の一員としての責任感が次第に芽生えていきました。

苫小牧地区には、現在のノルディーア北海道の前身であるASC adoomaがありました。山田静監督率いるadoomaは、全国を目指す強い意志をもって取り組んでいらっしゃいましたので、大会運営には気合も入り、また緊張感を持って臨みました。2009年に全国リーグ参入を決めたことは苫小牧地区にとって大きな出来事と言えます。この頃、北海道女子サッカーリーグには、明清高校の選手として髙瀬選手（現INAC神戸）も参加していましたので、運営に携わっていた者としては感慨もひとしおです。

また、adoomaが札幌地区に移転したのちは、高いレベルで中学生選手が活動できる場がなかったのですが、ASC北海道が、レディースチームを再度発足してくれたことで、U-15年代の選手たちの活躍は目覚ましく、2019年には、北海道の第一代表として、全日本選手権に出場するまでに成長しました。これまで、少年団を卒団したあと、他の地区まで通ったり、やめてしまう選手もいましたが、今は苫小牧地区の中で継続して競技を続けられるようになりました。チームの皆さまにとても感謝しています。

サッカーの楽しさを共有できる仲間を増やしたい

運営した大会に出場した選手が、全国大会に出場したり、強豪校に進学したり、そういった身近な活躍が、私にとっては、心から嬉しい出来事です。このような地域レベルでの感動の積み重ねが、なでしこジャパンの感動をより大きなものにしているのではないかと思います。苫小牧地区から、北海道から、全国で活躍してほしいと願うのは、様々な形でサッカーに関わる方を勇気づけ、元気づけてくれるからだと思っています。

女性がサッカーを継続するうえで、結婚や出産など、様々な場面に遭遇します。私自身は、子育てをはじめてからサッカーに出会いましたが、一緒にサッカーを楽しむ仲間には、これから女性としての転機を迎える方もいらっしゃいます。若い選手の皆さんは、まずは進学という節目を迎えます。選手として、または指導者や審判、運営スタッフとして、選手のお母さんとして、どんな形であっても、「サッカーの楽しさ」を胸に、サッカーに関わり続けてもらえたら、多くの感動を共有できると思います。私は女子委員長1年目であり、まだ分からないことだらけではありますが、今も感じている楽しさを継続して持ち続けて、活動したいと思います。

MAI NAKAMURA

中村 麻衣

JFA女子サッカー普及コーディネーター北海道　札幌地区担当／
公益財団法人北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
一般社団法人札幌サッカー協会 理事 女子普及担当／
TeineEGZASFC監督 兼 選手／リカシィ コーチ／なでしこ治療院 院長（鍼灸師）

2009年、ASC adooma（現ノルディーア北海道）のキャプテンとして、
全国リーグ参入を決めた中村麻衣さん。
選手時代に支えてくださった方への恩返しとして、楽しくサッカーを続けられる
環境づくりに挑んでいます。

選手時代に支えてくださった方への恩返しとして

小さいころから近所の「お兄ちゃんたち」とサッカーで遊ぶ機会が多く、サッカーに触れた時期は比較的早かったと記憶しています。高台イレブンやエンジェラーズJr.でサッカーを楽しみつつ、体操やソフトテニスを習ったり、中学校の部活動としてソフトボール部に所属するなど、様々な競技を経験しました。とにかく体を動かすのが大好きな子どもでした。高校生になり札幌北斗高校サッカー部に入部。

1年生のときに強豪高校の選手に交じって選抜チームにも選ばれましたが、試合には出場できず悔しい思いもしました。その後、ノルディーア北海道の前身であるFC adooma（その後ASC adoomaに名称変更）に所属。2009年、御殿場で行われたチャレンジリーグ参入決定戦では、キャプテンとして参戦し、個性豊かなメンバーとともに参入を決めたことは忘れられない思い出です。

adoomaのチームコンセプトは、山田静監督が掲げた「北海道の土台作りとして全国に通用するチームになろう」。この考え方は今でも私の根源にあり、思えば、選手時代から抱いていた土台作りをしていくという気持ちの延長線上に、今の活動があるのかもしれません。選手時代に色々な方達に関わってもらい、支えてくださったことへの恩返しをしたいという気持ちが、今の自分の活動を支えていて、選手達が楽しく気持ちよくプレーできる環境をつくることが、そのお返しになるのだと思っています。

普及コーディネーターとして

ノルディーア北海道の選手として最後の年に、JFA公認C級コーチの資格を取得。指導者としての活動を通じて、北海道の女子サッカーのために自分にできることは何だろう、と漠然と考えているときに、JFA女子サッカー普及コーディネーター北海道（札幌地区担当）の話をいただきました。普及コーディネーターは、女子サッカー普及活動の調整役として、既存の事業や行事、制度などを有効活用し、それらを更に発展させ、また、女性がサッカーにより気軽にアクセスできる環境の創出や整備を様々な観点から促進する役割を担っています。「女子サッカー」とひとくくりに言っても、キッズやU-12、U-15、U-18、レディースと、様々なカテゴリーが存在し、その分大会が存在し、スタッフの力が必要なり、また、女子以外の他のスタッフとも連携していかなくてはなりません。とくに札幌地区は、女子サッカーにかかわるチームや選手が多いので、つなぐ役割が重要です。３年前、引き受けた当初は、何ができるのか、何が必要なのか、全くの手探りの状態でしたが、フットワークの軽さを武器にして、とにかく多くの方との直接会話をすることを心掛けました。その中で、キッズ年代の普及活動にご尽力されている佐藤公一先生や山脇先生、佐賀先生にキッズのイベントに声をかけていただいたり、親身に相談にのっていただきました。皆さんのご助言を受け、普及コーディネーター２年目には、中学生年代に登録者数が減っていくという課題解決に向けて、札幌のU-15年代のチームと連携して、小学6年生と中学生チームの交流会を開催することができました。3年目は、札幌地区協会の今枝専務理事の働きかけもあり、札幌地区協会の女子普及担当の理事を任されることになり、北海道協会と札幌地区、様々なカテゴリーをつなぐことが少しずつできるようになってきたという実感を得ています。

ずっと楽しくサッカーを続けられる環境づくりを

本業であるなでしこ治療院の院長としての仕事でも、年代関係なく話ができることや、臨機応変に対応できること、何よりフットワークの軽さに、サッカーの経験は活きています。お客さまも、サッカーに全力過ぎる私を理解してくださっていて、ありがたいことに、応援してくださっています。選手時代からの仲間たち、指導者仲間、協会のスタッフの皆さん、指導しているチームの保護者の皆さんなど、私は、サッカーを通じてたくさんの方に出会うことができ、良いときも悪いときも声をかけてくれる人がいることに心から感謝しています。

私自身、出来なくなるまで、楽しくずっとボールを蹴っていたいと思っています。だからこそ、サッカーをやりたいと思っている人達が環境のせいで出来ないということが無いようになっていってくれたらいいな、と思います。各年代でサッカーとの関わり方が変わってくる時に、どのカテゴリーでも楽しくずっとサッカーを続けられる環境になるよう、これからも活動を続けたいと思います。

MIKI TAKUMA

詫間 美樹

北海道札幌東商業高等学校女子サッカー部 監督／
北海道札幌東商業高等学校 教諭／
＊2021年度よりノルディーア北海道 監督

なでしこリーグ1部アルビレックス新潟レディースで活躍された詫間美樹さん。
選手として、厳しくも愛情ある指導を受けて成長したことで、
コーチングの重要性や指導者としての姿勢を学ばれ、
この経験を北海道の女子サッカー界へ還元してくださっています。

アルビレックス奥山監督の厳しくも愛情ある指導で精神的に成長

幼少期に年上の従兄弟に教わったのがサッカーとの出会いだったと思います。小学校に上がる前から友達や保育園の先生を相手にドリブルをしていたことは覚えています。小学3年のとき札幌信濃サッカー少年団の女子チームには姉や友達と一緒に入団。週3回の練習が待ち遠しくて、どんどんサッカーにのめり込んでいきました。その後、札幌アグレ厚別信濃FC、札幌リンダを経て、北海道文教大学明清高等学校女子サッカー部に入学し、自分の力を試すべくインカレ常連校である東京女子体育大学に進学。卒業後は、なでしこリーグ1部のアルビレックス新潟レディースへ入団することができました。

アルビレックスでの3年間は競技生活の中で最もサッカーと向き合い、自分を成長させてくれた時間でした。サッカーに集中して取り組める環境は多くの人の関わりの中で成り立っていることを知りました。恥ずかしいことですが、大学生までの私は謙虚さを見失うところがありました。当時の監督の奥山達之さんからは、日常生活の甘さがサッカーに出ていると何度も指摘を受け、根気強く厳しく指導していただきました。厳しい指導の中にも愛情を感じることができ、必死に食らいついていきました。また、CBとしての能力を見いだし、育ててくれました。精神面へのアプローチがなければCBとして責任感のある選手にはなれなかったですし、安定したパフォーマンスもできなかったと思います。あの時、真剣に向き合ってくれたことを本当に感謝しています。

引退後、北海道で指導者の道へ

札幌に戻り、2014年から北海道文教大学明清高校で教員として女子サッカー部の指導をしました。明清高校には、卒業後に道外でプレーしたいという選手が多かったこともあり、どのような環境や状況でも自分を見失うことなくサッカーと思いっきり向き合ってほしいという思いで指導してきました。

2020年より、北海道札幌東商業高校で期限付きの教諭として、また、女子サッカー部監督として勤務することになりました。部員の半数以上は、中学校までは他競技経験者で、チームのレベルは高くありませんが、上級生が下級生に熱心にサッカー教えるなど、非常に仲の良いチームです。日々上達していく選手を見るとやりがいを感じます。今年度の高校選手権で初戦敗退はしましたが、選手の本当に勝ちたいというプレーを見ることができて幸せでした。また、全校生徒数が900名を超える規模の大きい学校なので、教員として働く中で、様々な視点で物事を捉える方法があるんだと教えられ、サッカーの指導の際にも、選手の視点を大切にするようになりました。

ノルディーア北海道監督への挑戦

昨年、JFA公認B級ライセンスを受講して、サッカーがもっとしたいという気持ちが強くなり、ノルディーア北海道のコーチとして、石井監督の下で指導の勉強がしたいとご相談したところ、監督としてやってみないかとお話をいただきました。何度か石井監督や、チーフマネージャーの金子さんとお話しを重ね、お二人のクラブや選手に対する思いの強さを感じ、監督として挑戦したいという気持ちを固めました。

ノルディーア北海道は、クラブとして2025年のWEリーグ参入を目標に掲げているので、できるだけ早く1部に昇格しなければいけないと思っています。そのためには、年間のリーグを戦う上で監督として戦略力を高めなくてはいけないと思います。指導者になって年間を通したリーグ戦は経験したことがないので、選手の起用方法など目先の試合にとらわれすぎないようにと考えています。また、選手一人ひとりがSNSなどを通してクラブを盛り上げるために熱心な活動をしているので、私自身も、ノルディーア北海道を多くの人に知ってもらうことを心掛けたいと思います。そして北海道全体のレベルアップのため、将来的には、「チーム北海道」と言う考えのもと、高校・大学・クラブチームがチームの垣根を超えて切磋琢磨できる環境があると良いと思います。例えば、チーム単位での合同練習や合同合宿などを定期的に開催することで、どのチームも刺激を受けることができると思います。

私は、サッカーを通して多くの人と出会い、大切な友人ができました。辛いことはたくさんあった気がしますが、克服できたのはサッカーが好きな気持ちとチームメイト、指導者仲間や選手に助けられたからだと思います。サッカーを通して諦めなければ何かが起こるという体験を何度かしてきました。そして、もし何も起きなくても、諦めなかったということが自信になりました。この自信を胸に、指導者としてさらに成長し、いくつになってもサッカーを誰よりも楽しんでいたいと思っています。

MESSAGE | 10

HIROE KANEKO
金子 弘恵

ノルディーア北海道 チーフマネージャー

ノルディーア北海道の金子弘恵さんは、
優しい人柄で、支えてくださる方との出会いを大切にしながら、
チームの可能性を信じてチーフマネージャーの責任を果たしてくださっています。

考えたこともない世界への挑戦 何もかもが初めての経験

2015年秋、「ノルディーア北海道で働いてみないか？」というお話をいただきました。その年の春に大好きな父が他界し、何をしても楽しくないし心にぽっかりと穴が空いたような状態がしばらく続いていましたが、何か新しいことに挑戦したいと漠然として考えていた時でした。それは考えたこともない世界への挑戦で不安もありましたが、それ以上に「挑戦したい」と強く思ったことを今でも鮮明に覚えています。

私自身サッカーの競技経験はなく、大きな声では言えませんがノルディーア北海道に携わるまで女子サッカーを生で観たことはありませんでした。

1年目は何もかもが初めての経験ばかりで「慣れる」のに必死でした。何が正解なのか？どうしたらよいのか？分からないことだらけでした。

当時スタッフだった浮田あきな氏（現：北海道リラ・コンサドーレ監督）からサッカーのノウハウをたくさん教えていただきました。彼女はコーチという立場で現場業務と並行しながら、積極的にクラブの運営にも協力してくれました。深夜にホームゲームの準備で荷物の搬入をし、守衛さんに怒られたことも今では良い思い出です。

たくさんの出会いを プレゼントしてくれたサッカー

サッカーは私にたくさんの出会いをプレゼントしてくださいました。一人一人が歩んできた人生の途中でサッカーが結びでくれた出会いの数々こそが原動力になっています。選手、スタッフ、北海道をはじめ全国のサッカーに携わってくださる方、どんな時も熱い応援をしてくださるサポーターの方々、チームの活動にご理解をいただきご支援していただいているスポンサーの皆様との出会いの一つ一つが宝物であり、今までクラブに携わってくださった方がいたからこそ“今”があると思っています。

自分一人の力には限界はあって、不甲斐なさや悔しさなどいろんな感情が湧き出ることがあります。ただ、その中でも手を差し伸べてくださる方、そしてアドバイスをくださる方、様々な角度からクラブを支えてくださる方の存在が私たちを成長させてくださいました。

私はサッカー経験がないので、選手たちに競技的なことはアドバイスはできませんが、社会人の先輩として自分の経験を伝えながら寄り添うことで、一歩踏み出すために背中を押せる存在になれたらと思っています。厳しくしなければいけないことの方が多いですが、いつも厳しいことを伝える時にこそ「今は分からなくても良いからいつか気付いて欲しい」そう思いながら一言ずつ丁寧に伝えるように心掛けています。

乗り越えられない壁はみんなで 乗り越える！

まだ航海の途中でこれからも挑戦は続きます。終わりはありません。この旅の途中には大きな壁はつきものだと思っています。一人では乗り越えられない壁はみんなで乗り越える！または破壊します！（笑）きっとこのクラブならできると私は信じています。なぜなら、ノルディーア北海道を愛してくださる人々の熱い思いがそこには存在しているからです。

だからこそ『仲間』が必要なのです。同じ目標に向かって、模索しながら成長し合えるそんな仲間をこれからも増やしていくのが目標です。そのためにはサッカーの素晴らしさをたくさんの方に伝え続けること、感動や悔しさの共有、サッカーが大好きでこのノルディーア北海道に来てくれた選手たちが輝ける場所を守り続けること、そして働きながらサッカーをしているアマチュアクラブだからこそ社会で担う役割は多く、可能性も無限にあると実感しています。女性活躍社会の中で、一番身近なスポーツとして社会へ貢献する人材を育成することがクラブの使命だと思っています。

AKINA UKITA

浮田 あきな

北海道リラ・コンサドーレ 監督／
JFA公認B級コーチ

全国リーグでの経験を下地にして、指導者として学び続けている浮田あきなさん。ナショナルトレセンコーチとしての10年以上の経験を活かし、ノルディーア北海道や北海道リラ・コンサドーレの監督として北海道の女子サッカーのレベルアップに貢献してくださっています。

全国リーグでの経験を指導者として北海道に還元

兄の影響でッカーをはじめ、附属釧路小学校サッカー少年団に入団。サッカー中心の生活がスタートしました。釧路リベラルティを経て北海道文教大学明清高等学校女子サッカー部へ進み、卒業後は、道外へ飛び出し、大原学園JaSRA女子サッカー部（現AC長野パルセイロ・レディース）の選手として、日本女子サッカーリーグに参戦しました。全国の女子サッカーのレベルを肌で感じ、同じ志を持つ仲間たちと真剣にサッカーに向き合いました。今でも、当時の仲間とは連絡をとっていますし、対戦相手だった方が今、指導者として活躍していることには刺激をもらっています。

©2020 CONSADOLE

卒業して、1年間は選手として大原学園に残りましたが、22歳のとき、釧路に戻りました。選手兼任でしたが、釧路リベラルティで指導者としての活動をスタートさせました。

振り返ると、高校時代から、「指導」することへ魅力を感じていたように思います。ロングキックが得意だったこともあり、後輩から助言を求められ、伝えていく中で、後輩たちが少しずつ上達していく姿を見た時は、自分のことのようにうれしく思えました。努力は本人たちによるものですし、ボールを蹴っているのは自分自身ではありませんが、自分の助言が活きているのではないかと勝手に思っていました。選手として自分自身の成果が得られなくなったとき、それでもサッカーを好きだという気持ちを持ち続けたとき、指導者という選択肢を選んだことは自然のことだったように思います。

©2020 CONSADOLE

大原学園在学中にJFA公認C級コーチ資格を取得しましたが、釧路で指導者として活動をはじめた翌年、B級を取得。そして、縁あってナショナルトレセンコーチの任に就きました。ユース年代育成のためのトレセン制度を牽引する役割を担う立場で、若いうちから指導現場に携わることができたことで、日本を代表する優秀な指導者の考え方を学び、北海道内の多くの選手に接する機会を得ました。

選手と接する中で、最も強く感じたことは、情報不足でした。今でこそ、なでしこの選手がSNS等を通じて、情報を発信していますが、10年前は、北海道の子どもたちは、日の丸を背負って活躍している北海道出身の選手のことさえ知らないこともありました。選手の技術の向上を目的とするだけではなく、北海道の外に広がる世界を教え、向上していく気持ちを芽生えさせることを意識していくようになりました。

選手からもらえる喜びが、指導者として成長するための原動力に

26歳のとき、指導者としての活動を続けながら、北海道教育大学釧路校へ入学。卒業のタイミングで、ノルディーア北海道のコーチにと、声をかけていただきました。その年の6月には監督に就任し、全国の舞台で戦いました。また、ノルディーアの選手が中心となって参戦したいわて国体では、北海道女子サッカー歴代最高位となる3位で終えることができました。監督として1年目だったこともあり、まずは、選手たちの気持ちを高めることを重視しました。国体での3位決定戦の前に「この大会で勝って終われるのは優勝と3位だけ。北海道の新しい歴史を作れるのはここにいる16人だけ」と声をかけました。選手たちがその声に応えてくれたことを嬉しく思い、誇らしく思いました。また、ノルディーアでは、現在のチーフマネージャーである金子さんとともに、広報活動や試合運営にも関わる機会をいただき、チームを支える仕事に対する理解を深めることにつながりました。

2018年、北海道リラ・コンサドーレの監督に就任しました。リラは育成年代の選手が多く、指導力が反映される年代であり、佐々木滋さん、今岡亮介さん、リラに関わる指導者・スタッフとともに、最も効果的なトレーニングを導き出すために、様々な議論をしながら、指導にあたっています。指導者同士、普段から積極的にコミュニケーションを図り、お互いの指導に対する考え方への理解が進んできていると実感しています。その理解の高まりが、チームの結果につながっていると思います。

成長を続けるリラの選手たちにもらえる喜びや選手たちが見せてくれる新しい世界があるからこそ、指導者として成長したいと思いますし、この気持ちをくれる選手たちのために、もっとよい環境を提供したいと思います。そのためには、北海道の女子サッカー全体の環境改善にも力を注ぐことも必要だと思い、北海道の女子サッカーに携わる一人として、多くの女性が、選手や指導者として活躍できる環境づくりへも貢献できればと思います。

MESSAGE 12

MAYU FUJIMURA

藤村 茉由

一般社団法人コンサドーレ北海道スポーツクラブ
スクールコーチ

周りの後押しのおかげで今があります と語ってくれた藤村茉由さん。
サッカーの楽しさを伝えるスクールコーチの仕事に全力で取り組み、
誰かの将来につながっていくよう、
まずは、自分自身が一番成長したいと教えてくださいました。

©2020 CONSADOLE

サッカーの楽しさを追いかけ続け、なでしこ1部で、地域のために戦う

2人の兄をみて、自分もサッカーをやってみたいと思い、2年生のとき向陵少年サッカークラブに入りました。とにかく楽しくて仕方がなく、啓北中学校でもサッカー部に所属。男の子と一緒にプレーしました。フィジカルの差を年々感じるようになり、悔しい思いもしましたが、高校でもサッカーを続けるため、地元の旭川を離れ、明清高校に進学。親元を離れ、寮での生活を経験して、家族の有難さを実感しました。また、中学までは、独りよがりな部分があったのですが、キャプテンをつとめたことで、まわりを見る力が少しずつ養われていったように思います。自分の意見や意思をはっきり伝えるようにし、コーチと選手の間の橋渡しをしていくことを心掛けました。何よりチームメイトに恵まれたからこそ、キャプテンを務めあげることができたと思っています。その後、尚美学園大学に進学し、北海道を離れました。埼玉の

©2020 CONSADOLE

川越にキャンパスがありましたが、サッカー以外で市外に出ることはほとんどなく、インカレを目指してひたすら練習の日々でした。
卒業後、なでしこ1部のAC長野パルセイロレディースに入団。大学までは、何も考えずプレーしていたのですが、全く通用せず、常に頭を使って考えることを要求されました。最初のうちは、頭と体が連動せず、パニック。それでも、根気強く指導していただき、また、チームメイトたちのサッカーに真剣に向き合う姿勢に刺激を受け続け、入団2年目にはレギュラーで使ってもらえるようになりました。長野は、地域に根差したチームであり、動員数はなでしこリーグで常に上位。私は、チームのスポンサー企業で働かせていただきながら選手としての活動を続けていましたが、地域が一体となって女子サッカーを応援している環境に感謝しかなく、地域のためにプレーしたいと思いました。

サッカーの楽しさを伝え、誰かの将来につながるように成長したい

選手として突き進んできた私でしたが、長野の3年目に、自分の将来に悩み、引退を決意し、北海道に戻りました。そのタイミングで、幸運にも現職のお話をいただきました。2019年、一般社団法人コンサドーレ北海道スポーツクラブのスクールコーチとしての活動がはじまりました。コンサドーレのスクールは、札幌だけではなく、恵庭・岩見沢・旭川・士別・室蘭・釧路・中標津・根室で、各地域の皆さんとも連携しながら、全道展開されています。年中さんから小学6年生までを対象としており、アカデミーの選手を目指して頑張る子も、楽しみたい子もおり、たくさんの子どもたちが参加してくれています。「北海道から世界へ」というトップチームの理念や「スポーツで北海道を元気にしていく」という社団法人の理念を実現するためには、サッカーを楽しむ子どもたちを増やしていくことが必要だと認識し、少しでも自分が役に立てるよう、成長したいと思っていますが、まだ、試行錯誤の毎日です。子どもたちにわかりやすい言葉を使うこと、ほめるタイミング、叱るタイミングなど、先輩から教わることが多く、選手のときとは、全く違う頭の部分を使っている気がします。

子どもの頃には、女性がサッカーを職業にするという選択肢は少なかったと思いますが、コンサドーレには、私のほかに、廣中千映さんや川端ありささんが働いています。なでしこジャパンの活躍や社会的な女性の地位の変化などあるかとは思いますが、宗像訓子さんや浮田あきなさんをはじめ、サッカーに関わってくださる多くの女性の皆さんの役割が認められ、そして、コンサドーレが女性スタッフを必要としてくれているからこそ、今、スクールコーチとして働くことができていると思います。

私自身は、サッカーを続けたいという気持ちが先行して過ごす中、将来のことを漠然と不安に思うこともありましたが、2021年にはWEリーグがスタートし、女性がサッカーを職業にできる環境も少しずつ整ってきているように思います。まだ、自分自身の将来の目標をはっきりと描けているわけではないのですが、自分の行動が、サッカーを続けたいと思う女性の将来に何らかの形でつながるかもしれないという意識も持ち、そして、子どもたちにサッカーの楽しさを伝えることができるよう、今できることを精一杯やっていきたいと思います。

MESSAGE 13

AKIKO HAMADA

浜田 亜紀子

株式会社コンサドーレ
マーケティング・プロモーション事業部プロモーション担当

コンサドーレのクラブ全般のプロモーション業務とともに、
アカデミーチームの広報業務もご担当されている浜田亜紀子さん。
リラ・コンサドーレの立ち上げにもご尽力されました。
女性スポーツの環境改善にも心を寄せ、個人としての思いも語ってくださいました。

一般社団法人の設立準備に向けて北海道に移住

大学卒業後にスペインへ語学留学をしており、そこでリーガ・エスパニョーラに魅了されたのがサッカーにはまったきっかけです。サッカーが文化として生活に根付いて人々の人生を彩っている素晴らしさや、民族のアイデンティティをサッカーが背負っている重みなどを知り、サッカーに対する概念が変わりました。その後、現コンサドーレの代表取締役社長の野々村芳和が東京でサッカー解説者や会社経営をしていた際、7年程マネージャーをしていましたが、野々村がコンサドーレに入り、2013年に一般社団法人コンサドーレ北海道スポーツクラブの設立準備を任されることになり、北海道へ移住してきました。

©2020 CONSADOLE

「女子チームを作る」という大冒険

コンサドーレが社団法人を設立した意図は、株式会社コンサドーレのGMであり、社団の代表理事である三上がよく言っている「北海道を元気にすることがコンサドーレの使命。サッカーはその手段のひとつ。」という言葉によく表れていると思います。単なるサッカークラブではなく、スポーツを通じて北海道を元気にしていくという意志表明のひとつが社名から「フットボール」をなくし、「株式会社コンサドーレ」にしたことであり、もう一つが社団法人を立ち上げて、他競技の運営に乗り出したことです。その事業の一つとして女子サッカーチームを立ち上げたことは、世間的には自然な流れであったかもしれませんが、サッカー界において男女の壁はまだまだ厚く、実は他のどんな競技に乗り出す時よりも、「女子チームを作る」というのは非常に大きな挑戦であり、未だに大冒険の途中であると思っています。

コンサドーレが女子チームを設立しようとした背景には、長年スタッフとしてクラブを支えてきた宗像訓子さんの存在がありました。正直、クラブ内での女子サッカーに対する理解や支援が十分であったとは言えない状況でしたが、訓子さんの熱意がクラブを動かし、チーム設立に至りました。今まで培ってきたノウハウを女子サッカーにも生かし、女子サッカーの発展に寄与したいという思いを、現在はクラブとしても持っていますが、やはり女子特有の問題についての解決方法はまだまだクラブとしても経験が足りないと感じています。

私自身も当初、女子サッカーの問題点は組織が整備されていないことや、プロ化されていないことなど、Jリーグを基準とした側面しか見ていませんでしたが、だんだんと内情を知るにつれ、女子サッカーだけでなく、女性アスリートを取り巻く様々な問題を知ることになりました。女性が女性らしく、という言葉は、昨今では推奨されないかもしれませんが、やはり男性とは違う成長曲線があり、生理的な変化があり、また人それぞれの選択ではありますが、子どもを産む、という人生の一大イベントで心理的にも身体的にも大きな変化が起きるのも女性だけ。そういった事とうまく付き合いながら競技人生を歩んでいくには、自分自身を正しく知ることや、周囲の正しい理解や協力が不可欠です。先日、FIFAが産休を導入というニュースがありましたが、女性が活躍するために男性と同じように振る舞うことを強要されていた時代から、女性が女性らしくキャリアを重ねられる新しい時代にようやく進めていると感じました。

女性が活躍できる場所を

コンサドーレのフロントにもここ数年で女性スタッフが多く入社し、部署によっては半数以上を女性が占めています。15年前に私がサッカー界に入ったときには、「選手と結婚狙い？」などと言われて悔しい思いをしたこともありましたが、女性がサッカーを観ることも、選手としてプレーすることも今では普通に受け入れられるようになっていますし、むしろSNSが普及するにつれ、女性をターゲットとした施策も重要になってきて、サッカー界で女性が活躍できる場所は年々増えていると感じます。

また、選手を引退した女性スタッフが、スクールコーチとしてなどクラブに増えてきているのも嬉しい変化です。彼女たちが十分にパフォーマンスを発揮できているかというと、まだまだこれからな気もしますし、本人たちにも、経験や体験を生かして新しい道筋を作って欲しいなと思います。それがクラブにとって将来、貴重な財産となっていくはずです。たくさんの人がスポーツを職業にできる世の中になって欲しいし、私自身、それを後押ししたいと思っています。男女や障がいの有無、年齢を問わず、スポーツを通じて全ての人を元気に笑顔にできるチームの一員として、サッカーを好きな気持ちを大切にしながら、仕事に向き合っていきたいと思います。

MESSAGE 14

SATOKO MUNEKATA

宗像 訓子

北海道コンサドーレ札幌 サッカースクールコーチ／アカデミーコーチU-12 Girls
JFA公認B級コーチ　47FAインストラクター
NPO法人 さっぽろAMスポーツクラブ

選手として全国リーグを経験し、指導者の道へ進んだ宗像訓子さん。
北海道リラ・コンサドーレの監督を経て、
現在はU-12年代の指導の傍ら、インストラクターの資格を取得し、
女性指導者育成にも力を注いでいます。

©2020 CONSADOLE

翼くんに憧れた女の子が 全国リーグ参戦、指導者の道へ

小学生のころ、キャプテン翼に影響され、壁に向かってボールを蹴る毎日。地元の少年団に入りたかったのですが、そのころは女の子という理由で入団できず、野球少年団に。放課後は野球、休み時間は男の子とサッカーをして過ごしました。野球少年団でも女子の入団は初めてだったようですが、受け入れてくださったことを本当に感謝しています。中学はバレーボール部、高校はバスケットボール部に。サッカーをやりたいという気持ちは持ち続けていたので、女子サッカー部のあった北海道女子短期大学に進学しました。女の子同士でボールを蹴った感動は、今でも覚えています。

エンジェラーズ、ベアフットに所属した後は、伊賀FCくノ一へ。北海道を離れ、Lリーグ（現なでしこリーグ）へ挑戦はできたものの、北海道のチームの一員として全国リーグを目指したくて、厚真町のFC adooma（現ノルディーア北海道）に加入しました。2009年、選手としてチャレンジリーグ参戦を決めたときのことは忘れません。チャレンジリーグ参戦2年目は、選手としての限界も感じ、コーチとして携わらせていただきました。選手として活動していたころから、㈱北海道フットボールクラブの社員として、スクールコーチの任に就いておりましたが、選手引退後、コンサドーレに女子チームをつくりたいという夢が明確になっていきました。

©2020 CONSADOLE

リラ・コンサドーレの監督として

2014年、㈱北海道フットボールクラブは、総合型地域スポーツクラブである「一般社団法人コンサドーレスポーツクラブ」を立ち上げました。ジュニアサッカースクールや他の種目を擁する中、当時、マネージメントを担当していた浜田亜紀子さんの働きかけもあり、女子チームの設立が実現しました。そのときは、北海道の女子選手のために、よい環境をつくりたいという気持ちが先行していたので、監督に就任すると思っていなかったのですが、選手たちのために、覚悟を決めました。

女の子でトップを目指す子がこんなにもたくさん増えているんだと驚きました。指導者として成長したいと強く思いました。勝ったことのないチームに勝利したときの喜びと感動は忘れられず、選手たちの一年一年の成長を知ることが本当にうれしかったです。

リラ・コンサドーレの監督として3年経過し、小学生年代からの積み重ねが大事であることを改めて気づかされました。コンサドーレとして、AMスポーツクラブと共同でU-12年代の女の子だけの活動の場をつくる計画が持ち上がったとき、U-12年代の指導者へシフトしたいと申し出ました。4種年代の指導は初めてで不安もありましたが、初年度から選手が集まり、2018年より活動をスタートさせることができました。

熊谷選手・髙瀬選手に続く選手を 女性がスポーツで活躍する環境を

W杯でなでしこJAPANが優勝した時に比べ、女子サッカーへの熱が、少し冷めてきているなと正直思います。お兄ちゃんがやっているからという理由で始める女の子はいますが、サッカーが好き、サッカーをやってみたいなどという子がなかなか増えていないように感じます。サッカーに対して純粋に魅力を感じる女の子を少しでも増やすために、北海道全体で取り組まなければならないと思っています。全国で戦うノルディーア北海道が、応援したいと思われる存在でいてほしいと思いますし、もちろん、北海道リラ・コンサドーレのなでしこリーグ参入も重要だと思っています。そして、北海道から熊谷選手や髙瀬選手に続く選手、なでしこJAPANで活躍していく選手が生まれる環境づくりや、選手を引退しても、指導者や審判、運営スタッフとなる女性を増やすこと、活躍できる場を作ることも必要だと思います。

北海道に女性のサッカーファミリーを増やすために、私自身にできることを考え、インストラクターの資格を取らせていただきました。2020年は、新型コロナウイルスの影響で、活動できませんでしたが、2021年は、女性指導者を増やし、北海道の女子サッカーの環境改善に貢献したいと考えています。

JUNKO MISAWA

三澤 絢子

札幌大学女子サッカー部ヴィスタ 監督／
JFA公認B級コーチ／
札幌大学事務職員

**チーム発足後、選手として、指導者として、
札幌大学女子サッカー部ヴィスタを引っ張ってきた三澤絢子さんは、
選手とともに成長しつつ、全国に通用するチームづくりと
サッカーに関わる人材の輩出に力を入れています。**

選手同士でトレーニングメニューを考えた経験が指導者の道へ

小学校2年生のころ、浦河サッカースポーツ少年団のコーチだった父とサッカーをしていた兄の影響で自然とサッカーを始めました。その後、浦河第一中学校を経て、室蘭大谷高等学校で、サッカー中心の毎日を送りました。大学進学にあたっては、はじめは栄養学を学ぶため、別の大学に進学していたのですが、どうしてもサッカーがやりたくて、札幌大学へ進路を変更しました。

札大女子サッカー部は、北海道における大学生の受け皿となるため、サッカーエリートを育てるのではなく、社会で活躍できる人材、社会に貢献できる人材を育てることを目的として、2009年に同好会として発足しました。2011年に正式に部活動として承認され、2014年にはじめて北海道女子サッカーリーグに参戦しました。当時、私は3年生で、キャプテンを務めていました。チームをつくっていく中で、選手同士でトレーニングメニューを考え、トレーニングを行うこともあり、自分自身とチームの両面からサッカーについてより深く考えるようになりました。そうした経験は指導者になりたいと考えるようになったきっかけにもなりましたし、現在にも活きています。

大学職員として働きながら、チームを指導

大学卒業後、指導者の道を目指しました。卒業した札幌大学で事務職員として業務を行いながら指導をさせていただく機会をもらいました。選手ではなく、指導者としてチームに向き合ってはじめて感じたことがいくつもあります。まずは、これまでのサッカー人生で出会った指導者の皆さまへの感謝の気持ちです。選手だったときには分からなかったのですが、今振り返ると自分の指導に対する考え方の基礎を教わっていたと気づかされました。そして、指導者として感じる勝利の瞬間には、心から幸せを感じます。もちろん、結果が伴わなかったとしても、サッカーを通して選手の成長を感じることができたときは、指導者をやってよかったと心から思います。

2016年、私たちのチームは、北海道女子サッカーリーグで初優勝し、2017年はインカレで初めて1回戦を突破しました。そして2020年は、道新旗でも優勝を飾ることができました。大学に女子サッカーの受け皿をつくるという発足時の理念どおり、今では全道各地から優秀な選手が進学先として札幌大学を選んでくれるようになりました。そして、卒業生の中には、ノルディーア北海道の選手として全国リーグで戦う選手も出てきました。

選手とともに成長を

全国的に見て、大学は、女子サッカー界を支える指導者、審判、運営スタッフなどを輩出する役割を担っています。私たちが加盟する全日本大学女子サッカー連盟でも、「社会貢献ができる人材及びスポーツ文化発展のためにそのリーダーとなる人材を養成する」ことを理念としています。私たちも、北海道でその役割を担える大学として、役割を果たしたいと考えています。現在、私たちのほかにも道内の大学で女子サッカー部が生まれつつありますが、今後、仲間を増やし、一緒に大学サッカー、北海道の女子サッカーを盛り立てていきたいと思います。

私自身、指導者としての経験不足から、自分の目指すチームに少しでも近づくためにはとにかく時間が足りないと思うことがあり、指導者としてもっと勉強したい、現場での実績を積みたいと強く思うことがあります。しかし、当然ながら仕事をおろそかにしたくはなく、もどかしくもあります。そんな中、私にとって、選手たちの存在が原動力となり、選手とともに目標に向かって取り組むことで、私自身がもっと頑張らなければならないと奮い立ちます。今後も、全国の舞台で対等に戦えるチームを作るとともに、卒業後もどんな形であれサッカーに関わり続ける人材を輩出するという目標に向けて指導者として少しでも成長し、信頼される指導者になっていきたいと思います。

AOI SAKAMOTO

坂本 葵

旭川実業高等学校女子サッカー部 監督／
JFA公認C級コーチ・GK-C級コーチ／公益財団法人北海道サッカー協会 GKプロジェクトメンバー／
旭川地区サッカー協会 女子委員会 委員／旭川女子トレセンスタッフ／
旭川実業高等学校 保健体育教諭

吉備国際大学の選手としてなでしこリーグに出場する目標を達成した坂本葵さん。
小さな成功の積み重ねを大切にすることを学生時代に学び、
地元旭川に戻り指導者の道へ。
選手一人ひとりの声に耳を傾け、指導に当たっています。

学生時代に学んだ「小さな成功を積み重ね大きな自信にすること」

小学生の頃はスポーツが苦手で、2つ下の弟が入っているサッカー少年団には6年生になってようやく興味を持ちました。しかし6年生から入団することは難しく、そのまま中学へ進学。それでもサッカーをやってみたいという気持ちが残っていて、親と話し合い、旭川地区サッカー協会に相談してもらいました。そして、自分のサッカーの道をスタートした旭川市立永山南中学校サッカー部に入部しました。旭川女子アチーボにも所属しながら中学時代を過ごし、室蘭大谷高等学校に進学。大学も、強豪吉備国際大学を選びました。

高校では試合に出続けていましたが、全国から優秀な選手が集まる大学サッカーではTOPチームに入ることすらできませんでした。個のレベルも足りず、ビルドアップ、特にキックが苦手でした。セービング・コーチングだけでは勝負できず、得意な事だけではダメだということを痛感しました。それでも、「なでしこリーグに出場する」という目標を定め、自主練に励みました。特にロングキックを左右両方蹴れるよう毎日取り組み、目標としていたなでしこリーグには、交代ではありますが10分弱出場できました。そして、小さな成功を積み重ね大きな自信とすること、その自信がいつか希望になること、努力することは決して無駄ではないことを大学4年間で学びました。

選手を引退し、地元高校の監督に

大学３年の冬、旭川実業高等学校男子サッカー部の富居監督から、女子サッカー部創設にあたって、指導者をしないかと声を掛けられました。4年生になり、同期のほとんどが選手を続けようとしている中、教員をしながら指導者になるか、選手を続けるか、悩みました。22歳という年齢でしたので、体も動きますし、GKというポジションに需要もあり、何よりサッカーが大好きだったので選手を辞めることに踏み出すことができませんでした。一方、いつかは指導者として地元に戻りたいという思いもあり、このご縁を大切にしたいと考え、大学卒業というタイミングでの選手引退を決意し、指導者になることを決めました。

旭川実業高等学校女子サッカー部は、創部４年目のチームであり現在は22名の選手で構成されています。年々旭川地区以外からも入部してくれるようになり、下宿生も6名います。個性を大事にし、感謝の気持ちを忘れず、文武両道そして一生懸命プレーできる選手を育てたいと思っています。全国でも戦えるチームにすることは私が指導者になった時に決めた目標です。

今は、自分自身の指導のレベルアップを図るともとに、選手一人ひとりに耳を傾けることを心掛けています。試合に出られない選手やプレーが上手くいかずに悩んでいる選手に、自分が選手時代に同じ悩みを抱えたときにどうしていたかを話しています。自分にできる最大限のアドバイスやサポートをして、選手たちの成長をお手伝いしたいと思います。必死に戦っている姿、勝って喜んでいる姿、時に悔しがっている姿、成長している姿、私にたくさんの笑顔をくれるそんな選手達が居るからこそ今の自分があると思います。

旭川、北海道の女子サッカー発展のために

現在、部活動での指導のほか、旭川女子トレセンスタッフとしても活動をはじめています。毎週木曜日東光スポーツ公園でU-12、U-15年代の選手の練習を指導しています。旭川には女子選手を指導するスタッフが少なく、私が中学生の時に指導していただいた鈴木先生と藤村先生が今も指導している状況です。今後の旭川の女子サッカーの発展のためにも女子を指導するスタッフや女性指導者を増やすことは重要だと思います。また、この活動では、社会人も参加できるのですが、なかなか練習にいらっしゃる方がいない状況です。

サッカーと関わって今年で15年目ですが、中学・高校・大学・社会人、試合や北海道合宿、ナショナルトレセン、講習会や研修等、色々な場面で、たくさんの人に出会い、たくさんのことを学びました。そして、つらいときも支えてくれる大切な仲間を得ました。

だからこそ、旭川地区、北海道の女子サッカーを盛り立てていって仲間を増やしたいと思います。そして、たとえば、小さい子供から高齢者まで、サッカーやフットサルがコミュニケーションツールや健康保持増進の為のスポーツとして気軽にできるものになっていければと思っています。

MIYAKO KUKITSU

茎津 都

一般社団法人北海道フットサル連盟 常務理事 事務局長 フットサル女子委員長／
有限会社くきつ 代表取締役

**北海道のサッカー・フットサルに40年間関わり続けている茎津都さん。
「女子」のフットサル、サッカーの将来を見据え、
より良い体制を考え続けてくださっています。**

4名でスタートした北海道初の女子サッカーチーム「美香保リーボンズ」

私の通っていた中学校は、サッカーの強豪校だったこともあり、サッカーには興味を持っていました。実際にはじめたきっかけは今から40年前の高校生の頃。友人とともに札幌大学の柴田先生のご依頼でサロンフットボールフェスティバルなどをお手伝いすることになりましたが、そのとき、「北海道でスパイクシューズを履いてサッカーをする女子チームを作りたい人がいます」と現在、北海道協会の女子委員としてご尽力されている佐藤美幸さんを紹介されました。佐藤さんをキャプテンとして、北海道初の女子サッカーチーム美香保リーボンズを立ち上げました。当時18歳、4名からのスタートでした。20代に入って、現なでしこの監督である高倉麻子さん擁するFCジンナンとも、全国大会（現皇后杯）で対戦しましたが、圧倒的な実力の違いに何もできずに終わったことを覚えています。この経験は、良い思い出となり、その後のサッカー経験においてもプラスになっています。

怪我のために一時選手からは離れましたが、主婦になった30代は、昔のチームメイトや当時のライバル（？）たちに声をかけ、主婦主体のママさんサッカーチームを立ち上げました。当時の「プリマカップ」を目指し、6年間サッカーを続けました。

フットサル連盟の女子担当として

北海道内で、女性のフットサルを普及発展させようとする機運が高まり、フットサル連盟の中に女子担当が設けられました。このとき、担当者として声をかけていただいたことが、現在までフットサルに関わり続けるきっかけとなりました。

北海道初の女子サッカーチーム「美香保リーボンズ」

北海道では、フットサルと称される前から、冬場のスポーツとして、ミニサッカーや5人制サッカー大会などが盛んに行われていました。とはいえ、女子担当として関わりはじめたころ、女子フットサルチームはありませんでした。しかし、その年、里田まいさん所属のアップフロントエージェンシーより北海道サッカー協会に「北海道に女子フットサルを普及させませんか？」との話があり、初心者のための女子フットサルリーグ「ノービスリーグ」が誕生。第1回は10チームが参加しました。スポーツ誌やSTV24時間テレビなど「里田まいのいる女子フットサルリーグ」と報道されました。その後、サッカー経験者のチームが参加を希望し、競技フットサルのリーグが立ち上がり、現在の北海道女子フットサルリーグにつながっています。

今では、全国大会が北海道で開催され、毎年、道内のフットサルチームが上位に食い込んでいます。また、女子フットサルの全国リーグにエスポラーダ北海道イルネーヴェが参戦するなど、着実に歩みを進めています。

「女子」が盛り上がっていくために

北海道ではサッカーの選手が冬場にフットサルを行うことが通例となっていますが、今後も、全てをサッカー・フットサルと別に考えるのではなく、育成年代やU12年代のようなサッカーの技術向上のためにフットサルを取り入れることも必要と考えます。「ただボールを蹴る」との発想だけではなくフットサルを取り入れ、プレーに幅を持たせるとともに、将来サッカーを引退してもフットサル選手として活躍できる「北海道の強い女子」を作ることが必要ではないかと思っています。

今年度、コロナウイルスの影響で大会が行えない状況ですが、将来に向けて、北海道女子フットサルが目標とする場所を見失うことの無いような活動や運営をしていきたいと思っています。そのためには、多くの課題を乗り越えなければならないと思っています。現在、旭川および札幌中心で行っている女子フットサルですが、全道各地で「地元で楽しめるフットサル」にすることも必要ですし、競技フットサルに関しては、ブロック予選が行われるフットサル環境ができればより強化にもつながると考えます。

フットサルと関わっていなければ、主婦として家族との生活のみだったと思いますが、フットサル女子の発展の為に真剣に考えられる現在があることは、自分の人生にとってプラスになっていると感じています。北海道のチームが全国で良いプレーをする姿を見ると、一緒に元気をもらえます。フットサル、サッカー共に「女子」が盛り上がっていくために、「検証し行動し運営すること」を念頭に、全ての役員で前向きに意見を出し合い、「女子の発展」を考える人たちの意見を土台にしてより良い体制が作れるよう考えていきたいと思います。

KUMIKO MORINO

森野 久美子

エスポラーダ北海道イルネーヴェ コーチ U-15監督／
公益財団法人北海道サッカー協会 女子委員会 委員／
北海道フットサル連盟 常務理事

ノルディーア北海道、エスポラーダ北海道イルネーヴェの選手として、
サッカーとフットサルの全国リーグに出場した森野久美子さん。
現在は、イルネーヴェのコーチとして、多くの仲間と切磋琢磨し、
挑戦することの楽しさを伝えながら指導にあたっています。

フットサルに出会い、もう一度ボールを蹴る楽しさを感じた

中学校の頃、函館でU-15の大会があり、参加者を募集していたのがきっかけで、クラブチームでサッカーを始めました。また、サッカーの練習がない日は、中学校ではバトミントン部に、高校ではハンドボール部に所属し、とにかく体を動かしていました。社会人になり、函館の時の指導者をたよりにFCadooma（現ノルディーア北海道）に入団。なでしこチャレンジリーグにチャレンジしていた時期は、一番

自分自身気持ちが入って成長できたかと思います。大きな目標があるということが良かったですね。仕事の都合上、土日しか練習にいけないという環境でしたが、チームのみんなといる時間が何よりも楽しい時間でした。

年齢とともに、試合に出れなくなり、いろいろな感情が出てきて、いつの間にかサッカーが面白くなくなっていきました。しかし、サッカーを引退してからフットサルに出会い、サッカーとは違う面白さを教えてもらいました。年齢を重ねてからもボールを蹴る楽しさをもう一度感じることができました。

2017年、フットサル選手としての転機が訪れ、「エスポラーダ北海道イルネーヴェ」の一員として、日本女子フットサルリーグへ挑戦することになりました。2017年５月、開幕戦はきたえーるでのセントラル開催であり、１点差で負けはしましたが、かつてのチームメイトや友人たち、職場の仲間など、多くの方の声援の中、コートに立ち、得点をもぎとったことを今でも覚えています。

エスポラーダ北海道イルネーヴェの指導者として

2020年より、エスポラーダ北海道イルネーヴェのトップチームではコーチとして、監督のサポートをしています。練習時の補助やフィジカルのサポート、試合前のアップや試合の分析を行っています。また、U-15のカテゴリーでは、トップにあげる選手を育てるように練習メニューを組み立て指導しています。フットサルの細かい戦術や分析方法は、日々メモを取り自分なりに勉強しています。また、今では多くの動画がネット上で見れるので、フットサルの試合や練習方法などの動画を時間があれば見るようにしています。

私が選手の頃感じていた、勝ちたい、負けたくない、もっと上手くなりたいという気持ちを、指導者となった今でも持つことによって、今の若い選手に挑戦することの楽しさを伝えることを心がけながら指導にあたっています。

エスポラーダは、北海道に関わりのある選手だけで日本のトップリーグで戦い続けています。限られた選手層で男女とも戦い続けていることには様々な意見があるところですが、本当にすごいことだと思っています。選手時代にフットサルという競技を北海道に確立し、引退してからフットサルの指導を学び、いくつもの戦術を実践しているエスポラーダの指導者の皆さんは憧れであり、私がこれから目指す場所だと思っています。

多くの仲間と切磋琢磨して女子の環境を整えていく

サッカーもフットサルもともに全国で戦える舞台が北海道内にはあります。私たちの育成年代にはそのような舞台がありませんでした。全国の舞台に立てる選手を一人でも多く輩出できるようにしていきたいです。そのためには、北海道のトップリーグのチームは、多くの人が憧れるチームにならなければなりません。まだ、女子のフットサルを競技でやろうという選手は少ないです。なでしこジャパンの活躍もありまだまだフットサル選手よりサッカー選手を目指す人が多いのが現状だと思います。そんな中でも、北海道の冬はフットサルという文化があるので、少しでも多くの少女にフットサルの楽しさやサッカーとの違いを伝え、フットサルの競技を広めていきたいです。

サッカーとフットサルによって、沢山の仲間に出会えたことは私の財産です。そして、今、私のかつてのチームメイトたち、全国リーグの経験者たちが、指導者として活躍しています。練習試合や合同練習を行い、困った時には相談し合いながら切磋琢磨しています。私は、自分の体が動くうちは現場での指導を続けたいと思っており、現場で動くことが難しい年齢になったら女子サッカーやフットサルの環境を整えられる立場になっていたいと思います。子どもたちが北海道を離れず、北海道内に目指せるチームがあり、北海道出身のなでしこリーグで活躍している選手が、帰ってきたいと思える環境を作っていきたいと思います。

MIZUHO AKI

安芸 瑞穂

公益財団法人北海道サッカー協会 事務総長

**北海道協会の事務総長として、多岐に渡る業務を束ねる安芸瑞穂さん。
サッカー出身者ではないからこそ持ちえた客観的な視点で、
北海道のサッカーのために力を尽くしてくださっています。**

バレー部員としての経験

小学生の頃、キャプテン翼が大好きで、女の子達とサッカーごっこをして遊んでいたところ、男子から「女子のくせにサッカーしてる！」とからかわれ、すっかり熱が冷めてしまったことを今でも思い出します。小学生当時は男子よりも体格がよく、サッカー少年団の男子達より足が速かったので、からかわないで誘ってほしかったです。母がバレーボール経験者ということに影響を受け、中学では迷わずバレー部に入部。弱小チームでしたが試合が楽しくて、体を動かすことが楽しくて、仲間もできて、中学校での一番の思い出です。高校は遠距離で部活動は断念。短大に入り、当初はバレーを続けるつもりはなかったものの、見学に行った先でバレー部の監督に新入部員と紹介され、気づいたらバレー部の一員になっていました。予定外の出来事ではありましたが、今となってはきっかけをくださった北海道バレーボール協会の花田徹夫先生には大変感謝をしています。3年のブランクは想像以上に厳しく、腰痛などにも悩まされましたが、新しく仲間ができましたし、道外遠征や合宿など一通りの経験をしたことは今の仕事に活かされていると思います。何を始めるのも環境ときっかけが大事だと思いました。

皆さんに支えられながら、協会職員としての実績を積んでいく

大学卒業後、初めて就職した職場の業務が7年目に一区切りしたとき、北海道協会で職員を募集していると人伝に聞き、退職する決意で応募しました。子供の頃、サッカーが大好きだったことを思い出し、やってみたいと直感的に思いました。実務経験もサッカー経験も無い私でしたが縁があって無事採用となりました。採用後は想像を超える業務内容、業務量に大変驚き、苦労しましたが、地区協会、各種連盟、委員会の皆さんに支えられ、そして皆さんを支えたい一心で頑張ってきました。当初は事務業務が中心でしたが、次第に札幌ドームでの大規模イベントの立上げ・運営や、国際交流大会のコーディネート、海外遠征帯同等の機会を頂くようになるなど、様々な経験を重ねることができました。

北海道サッカーのために力を尽くす

北海道のサッカー登録人口は1,477チーム、約39,000人で、チーム数は47都道府県サッカー協会中、第4位の大きな組織です。チーム・選手の活動を支える指導者は約3,300人、審判は約10,000人が在籍しています。全道各地にて実施する主催事業は年間300件以上にのぼります。その運営を担うのは、15の地区サッカー協会と10の各種連盟と20の専門委員会です（数字は2020年3月末時点）。いうまでもなく、北海道のサッカーを支えるのは、これら団体と審判・指導者の皆さんであり、ほとんどの方は他に本職をお持ちでボランティアとして携わって頂いています。

私たち協会職員の仕事は、ボランティアとして携わってくださるサッカーファミリーの皆さんをサポートし、サッカーを振興していくため、組織運営、事務局運営、ファミリー拡大事業の企画・運営、国際大会運営、各種登録業務、合宿所運営、グラウンド管理、広報活動等々、様々な業務を行っています。サッカーを統括する唯一の組織であるJFAの傘下に置かれる北海道協会は、「北海道」の「サッカー」に関わることすべてが仕事だと認識しています。「すべて」であるが故に、業務の幅に圧倒されることもあります。しかし、大会や遠征でなど頑張っていた選手、指導者、審判の方がステップアップし、次のステージで活躍し、北海道のサッカーファミリーみんなの目標となっている姿に、心を動かされ、仕事に向かう力になっています。

今後、北海道協会としては、女子がサッカーを始めやすい環境を作っていくことを一つの目標にしています。北海道の人口は男性約250万人、女性約280万人ですが、サッカー登録人口となると男性約3.7万人、女性約2千人と、5%ほどしかいません。ここに行けばサッカーができる、毎年このサッカーイベントに参加するなど楽しみの1つとして始めてもらえる環境を作りたいです。また、ボランティアの皆さんがやりがいを持てるような関わり方を提案していくことも必要だと思っています。そして、施設整備は、普及育成に欠かせません。グラウンドの天然芝、人工芝化、ロッカールーム設置。女子も車で着替えるのが当たり前といった状況を少しでも改善していきたいです。課題や目標は尽きませんが、これからも精いっぱい北海道のサッカーのために力を尽くしたいと思います。

YUKIKO NAGAHAMA
長濱 由紀子

公益財団法人北海道サッカー協会 事務局長

300 以上もの事業の決算書類を確認し、取りまとめをされている長濱由紀子さんは、いつも丁寧かつ迅速にボランティアスタッフの皆さんをサポートし、公益財団法人としての健全な財務体質維持に務めています。

長年のOL生活で培った事務スキルを活かして協会事務職員へ

中学はバスケットボール部、高校は軟式テニス部に所属し、いずれも主将でした。部活の主将という立場だと、自分のプレーに専念できないことがしばしばであり、チーム全体に気を配らなくてはならないことに悩んでいたことを時折思い出します。中学の時、二度と主将なんてやるものか、と思っていたのに高校でも引き受ける事になり、そういうことが好きな人と見られることにも悩んでいました。今思えばどうでもないことですが、思春期のときは真剣でした。

プライベートでゴルフをたしなんでおり、前職は北海道ゴルフ連盟。OL生活が長いため、事務処理のスキルに関しては自然と身についてきたと思います。サッカーとは無縁の世界におりましたが、新聞の折り込み求人チラシを見て、この世界に飛び込み、現在、主に経理・財務関係を担当しています。

健全な財務体質を構築し、公益財団法人としての責任を果たす

北海道サッカー協会は、FIFAワールドカップやJリーグの運営に向けて、1998年に財団法人化を果たしました。その後、ワールドカップの成功やコンサドーレ札幌の活躍により、登録者数が拡大。さらなる普及拡大や競技力向上等を目指すためには、より一層の公益性が求められるものと認識し、2013年に公益法人の認可を得ました。公益法人として、財務体質を健全に保つことは、重要な役割の一つです。JFAからの交付金や各事業収入に加え、サッカーファミリーの皆さまからの登録料を効果的かつ適切に事業に活かすこと、その流れを明確にして、正しく公開し説明責任を果たすことは使命とも言えます。私は、会計・財務を担当する責任の重さを感じつつ、日々業務にあたっています。

とはいえ、実際に、北海道の各地で開催される300件以上の事業の決算書類として一次資料をそろえてくださるのは、ボランティアとして事業を担当される皆さまです。現場で事業を推進するだけではなく、請求書や領収書、参加者名簿や報告書などの証拠書類を整理するのは相当な業務量だと思います。ご担当される方が必ずしも同じ方とは限りませんので、はじめての業務に戸惑われることもあるかと思います。そのため、ご担当される皆さんが少しでも動きやすくなれればよいと思い、新しい会計年度になる前には、ルールに従いつつも業務の簡素化を目指して、財務委員会の皆さまや専門家の皆さまと議論してマニュアルを整備したり、会計責任者会議を開くなどの工夫をしています。

私は、多岐に渡る業務を理解したうえで、これらの書類をとりまとめ、適正に処理されているのかを一つひとつ確認し、財務諸表を整えていきます。数字が合ったときや期日までに処理が終わったときは、責任の重さから少し開放され、心から安堵しますし、どんなことでも「ありがとう」と言われたときには嬉しさとともにやりがいを覚えます。皆さまの立場に立てる心の余裕を持ち、平等に接することを心掛けるとともに、後進の育成にも努めつつ、今後も北海道サッカーのフロントスタッフとして、責任を果たしたいと思います。

2020年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため7月いっぱいの主催事業を自粛しました。8月以降、運営スタッフの皆さんは、再開を心待ちにしていた選手の気持ちを一番に考えて、実施する決断をしてくださり、万全な対策がとれるよう何度も協議を重ねてくださいました。また、選手・チーム関係者の皆さまにも感染防止に向けて多大な御協力をいただきました。この場をお借りし、お礼を申し上げます。

（公財）北海道サッカー協会
事務職員一同

SHIORI KAWAHARA

河原 しおり

公益財団法人北海道サッカー協会 女子ユースダイレクター
技術委員会 女子担当　北海道トレセンスタッフ／
札幌東商業高校 保健体育科教諭
（現在育休中；女子サッカー部監督*2018・2019年度）

全国でも例のない女子ユースダイレクターとして、
普及から育成まで幅広い業務を担ってきた河原しおりさん。
育休後、指導者や女子ユースダイレクターとして活動することで、
女性のサッカーへの関わり方の選択肢を示したいと力強く語ってくれました。

全ての経験が私を成長させてくれた

父の影響でサッカーをはじめ、小学校1年生のとき、同級生や幼なじみなど、約10名の女子と一緒に深川JFCに入団。中学・高校ではJ・シーガルに所属しました。中学生から大人まで一緒にプレーしていましたが、オンもオフも楽しく、全員が集まる週末が待ち遠しかったことを覚えています。指導者となった今、サッカーを楽しみ、自分の居場所があると思えるチーム作りがしたいと思えるのは、J・シーガルのおかげです。

小さいころから、保健体育の教員になることが夢だったこともあり、筑波大学に進学。大学では、チーム運営から遠征の手配など、マネジメント全てを部員で行う必要があり、これまでたくさんの方々に支えられてサッカーができていたことに気づかされました。学生時代のすべての経験が私を成長させてくれましたが、中でも、全国大学女子サッカーフェスティバルで実行委員長をさせていただいたことは印象に残っています。大会運営だけでなく、大学生による少女サッカー教室を開催し、アイディアを自分たちで形にすることの難しさと楽しさを学びました。また、大学4年のとき、CBの自分のせいで勝てないと苦しい時間を過ごしたことを忘れられません。次負けるとインカレ出場が厳しくなるという試合の前日に怪我をし、痛み止めとテーピングで無理矢理出場することになりましたが、そのとき、みんなに任せて自分のことに集中しようと試合に臨み、勝ちきることができました。自分だけで背負わず、チームのみんなを信頼して、ひとりひとりが自分のやるべきことに集中して責任を持つことでチームとして力が発揮されるということを強く実感しました。

初の女子ユースダイレクターとして

北海道の教員採用試験に合格したとき、小学生の頃からトレセンで指導していただいていたNTCの松田さんから女子トレセンスタッフをやってみないかと声をかけていただきました。指導者として選手育成に携わっていく中で、女子ユースダイレクターに推薦いただきました。女子ユースダイレクターは5年前に北海道で初めて設置された技術委員会所属の役職です。なでしこビジョンをはじめ、JFAの女子サッカーに関わる方針を基に、北海道では何ができるかを考え、進めていくことが大きな役割です。新しい役職でしたのですべてが手探りでしたが、女子の普及や育成に関わる女子委員会、4種委員会、技術委員会などの皆さんからご助言をいただき、女子フットボールミーティングやU-13女子8人制サッカーフェスティバルを進めることができました。全国でも例がない役職だからこそ、やりたいことはどんどん進めていけるというやりがいも感じます。また、普及から育成まで様々な選手に関わることができ、多くの選手の成長が見られることも楽しいです。

現在、普及に関してはJFAなでしこ普及コーディネーターが、育成に関しては各ブロックに北海道トレセン女子U-14のチーフが配置されるなど、女子に関わる役割も整理されてきています。今後は、女子ユースダイレクターに求められることも変化していくものと考え、普及と育成をつなぐことに、よりフォーカスしたいと考えています。そして、女子選手や女性のスタッフが安心して活動できるような存在になっていきたいです。

子どもを育てながら、サッカーに関わり続ける選択肢

私は、今、育休中ですが、自チームでも女子ユースダイレクターとしても多くの方にサポートしていただきありがたく思っています。復帰後は、子どもが生まれてもサッカーに関わり続けることができるという姿を自チームの選手たちや他の女の子たちに見せていきたいと思っています。選手たちがいろんな選択肢を持ってサッカーと関わり続けられるきっかけになったら嬉しいです。そして、私が大事にしている授業、部活、サッカーに育児を加え、それぞれをリンクさせて、これまで以上に楽しみながら頑張っていきたいと思います。

これからも指導者や女子ユースダイレクターという立場で、サッカーの楽しさを知り、サッカーを通して成長できる仲間を増やしていくことで、これまでお世話になった北海道の指導者の方々や関係者の皆さんに恩返しをしていきたいと思っています。そしてサッカーが女性の生涯スポーツとして北海道に根付いてくれると嬉しいです。その延長として、国体や各年代の全国大会での北海道からの出場チームの活躍につなげて、北海道の女子サッカーがもっと盛り上がるよう、微力ながら尽力していきたいと思います。

PASS TO THE FUTURE

PASS TO TH

Let's do it now.　いつかやるなら今やろう。
個人的に好きな言葉なのですが、色々なこと、やってみてください。
気付いたときがチャンスだと思います！

中川 綾子

私はサッカーが大好きで、夢中になれる「何か」がサッカーの審判員でした。今は、たくさんのスポーツの選択肢がある中で、サッカーを選んだ選手にとっても、できるだけ長くサッカーに夢中になり、楽しんでほしいなと思います。

稲葉 里美

努力が報われない事もあるけれど、努力した自分を認めて褒めて欲しいです。負けた事も、悔しい事も全てキラキラした思い出になると思います。

長濱 由紀子

私は、ヨーロッパのサッカーを肌で感じたいために、3カ月の間、オランダを拠点に生活しました。生活に根付いたサッカー文化をはじめ多くを吸収して帰国しました。何かに興味を持ったとき、ネット情報に満足せず、可能な限り自分の目で確かめ、実際に行って見て触れ、人であれば実際に会って話してほしい。若い世代の方々には自分の「やってみたい」「行ってみたい」など直観や感性を大切にしてほしいです。

大岩 真由美

学校や仕事以外に他の人と繋がったり、同じ目的を持つことはなかなかできないことだと思います。サッカーという学校や仕事とは環境で気持ちを切り替えられたり、仲間と支えがあったり、サッカーをしていたら、それができます。好きなことを続けられる幸せを感じて欲しいです。

浅利 清美

今できるサッカーを全力で取り組んでください。そうすれば必ず上達します。伸びる時期には個人差があります。私は24歳でした。自分を信じて諦めないことが夢を叶える唯一の方法です。

詫間 美樹

将来のキャリアで不安を感じて立ち止まることもあると思う。今まで全力で取り組んできたからこそ見える先がある。ステップアップしていくためには自分の人生の先を見る力も必要。人と自分を比べるのではなく自分はどうしたいかが重要だと思う。自分の可能性を信じて後悔なく人生を歩んでほしい。人に話すことで解決策もうまれるから。いつでも相談に乗りたいと思います。

勝谷 忍

サッカーの技術がうまくなるだけではなく、自分のことは自分でやれる選手になってほしいと思っています。掃除、洗濯、食事の用意、後片づけ。特に食べることに興味を持って、お母さんの味を習得してほしいです。楽しんで食べて、自分の体を大切に健康管理ができて、強い体を作ってほしいと思います。

遠藤 晴美

何事に対しても一瞬一瞬に取り組んでみてください。またどんな小さなことでも良いので目標を持ちながら生活することを心がけてみてください♪気付いた時にはたくさんのことができるようになっているはずです。

金子 弘恵

毎日のトレーニングを大切に、いつも目標をもって取り組み、後悔のないサッカー人生を送ってほしいと思います。目標が叶うまでサッカーを続けてほしいと思います。私は選手時代にライセンスの取得をしておけばよかったと後悔しています。将来指導者になるならない関係なしにより良いサッカー選手になるためにチャレンジしてほしいと思います。若いうちに様々なことにチャレンジしてください。限りある選手としての時間を限りない人生の可能性に繋げてほしいと思います。

三澤 絢子

あいさつができて、自分のことをきちんとできる選手になること、オン・ザ・ピッチでもオフ・ザ・ピッチでも、常に周りに気を配れる選手であることは、成長の近道なのではないかと思います。

根岸 睦美

感謝することは、幸せに気づくこと。
「ありがとう」と恥ずかしくて言えなくても、「ありがとう」と、たくさん想える選手であってほしいと思います。
これからたくさんの「感謝に気づき」幸せなサッカー人生を送っていってほしいです。

宗像 訓子

HE FUTURE

あたえられた環境の中で、日々努力してほしいです。そして、目標を持ってほしいです。私たちが小学生中学生の頃と異なり、北海道内で上を目指す環境は整いつつあります。私も指導者として努力していきます。未来のなでしこを目指して、頑張ってほしいです。

森野 久美子

人と違うことをすること、がんばることは、恥ずかしいことではないことを分かってほしいと思います。
人の目を気にせず、自分が今やりたいこと、今できることを100%やり切ってほしいです。

浮田 あきな

今はまずサッカーを全力で、本気で、一生懸命頑張ってほしいです。「頑張るふり」をしていたら、自分には何も残らないし、いつか後悔します。失敗して悔しいことがあっても「やってやる」という思いを忘れず、楽しみながら何度もチャレンジしてくらいついていってください。サッカーでのそういう経験やそこで出会った人が全て自分の財産になると思います。

河原 しおり

サッカーができるうちは存分にサッカーを楽しんでください。やりきったと思ったら、北海道の女子サッカーの仲間を増やすために少し力を貸してください。時々会場へ来て選手を応援してくれると嬉しいです。一緒に楽しめる仲間が増えるといいなと思っています。

安芸 瑞穂

WEリーグができたことで、選手として挑戦できる環境は少しずつ整ってきています。
たくさん悩むかもしれませんが、挑戦できるチャンスがあれば、どんどん挑戦していってほしいです。

藤村 茉由

今回のコロナ禍ではいろいろ考えることがありました。
スポーツができることの嬉しさ、喜び、楽しさは誰もが感じることと思います。いつまでも、サッカー・フットサルを通じてその幸せを感じることができる人でいてください。

茎津 都

サッカーだけに限らず、年代ごとにやれることが変わってくる中で、自分がこうしたい。と思うことがあるなら、やらないで後悔をする前に、まずは色々な事に挑戦をしていって欲しいと思います。良いときも悪いときも、その時の自分がやれること・考えられることを見極めながら、ベストを尽くしてもらえたと思います。

中村 麻衣

スポーツ選手には人を幸せにする力があります。皆さんがプレーしている姿を観ることで、元気になる人がたくさんいます。誰もが持てる訳ではない、特別な力です。特別な役割でもあると思います。とても素晴らしいことですが、責任も当然あります。皆さんにはその自覚を持ってプレーして欲しいなと思います。

浜田 亜紀子

プレーヤー人生いいことよりも苦しいときの方が長いと私は思っています。今苦しい思いをしている選手も居ると思います。苦しいかもしれないけど諦めずに頑張ってください。苦しくても夢を叶えたときや目標を達成した 時の方が何倍も何十倍も嬉しく、頑張ってよかったって絶対思えるので頑張ってください。

坂本 葵

あとがき

本冊子は、北海道のサッカー・フットサルの道を拓いてきた女性たちの経験を若い選手たちにつなぐ一助として製作しました。21人の女性たちが乗り越えていった壁や選んだ道は様々ですが、競技・仲間・家族、そして自分自身に誠実に向き合って前進されたことを知ることができます。
2020年、コロナ禍にあっても、選手の皆さんは礼儀正しく、仲間のために声をかけあいながら、一つひとつのプレーに懸命であり、そのような姿を見て、困難に立ち向かうための素地を十分お持ちなのだと胸が熱くなり、さらなる後押しにつながるよう、心を込めて本冊子を編集しました。いつか、皆さんが大人になり、サッカーに関わり続けてくださったのなら、ぜひ、この誌面でご紹介させてください。

素敵な表紙デザインとご助言をくださった札幌大同印刷㈱の岡田様、各所調整を一手に引き受けてくださった北海道協会事務局の水野様、休み時間になるとサッカーの書類を机に広げる私を理解してくださる私の職場(㈱札幌ドーム)の皆さまにこの場をお借りし御礼申し上げます。

北海道のサッカーに私をつないでくださった
大学の先輩・ノルディーア北海道初代監督
である山田静さんに心からの感謝をこめて

編集
公益財団法人北海道サッカー協会
女子委員会 副委員長

橋本 美湖

JFA 女子サッカーデー

PASS TO THE FUTURE

［北海道のフットボールを支える女性たち］

発行日：2021年3月8日

発行：公益財団法人 北海道サッカー協会

〒062-0912 札幌市豊平区水車町5丁目5-41 北海道フットボールセンター　TEL 011-825-1100　FAX 011-825-1101

URL　https://www.hfa-dream.or.jp

監修：公益財団法人 北海道サッカー協会　女子委員会

※本誌の記事・写真・図表・ロゴマークなどの無断転用を禁じます。　※本誌に掲載されている所属・役職等は2021年1月時点のものです。